

教育実践総合センター年報

滋賀大学教育学部
Faculty of Education



2020年3月 第3号



目次

教育実践総合センター年報 第3号

1 共同研究事業 1

- | | |
|---|---------|
| 1-1) 研究員派遣による学校支援に関する研究 (理科) | (藤岡 達也) |
| 1-2) 滋賀県学校安全教育推進プロジェクト | (藤岡 達也) |
| 1-3) プログラミング教育プロジェクト研究 | (松原 伸一) |
| 1-4) 外国語プロジェクト研究 | (大嶋 秀樹) |
| 1-5) 科学的に探求するために必要な資質・能力の育成を目指した高等学校理科の授業改善 | (加納 圭) |
| 1-6) 書くことで自分の学びを豊かにすることができる子どもの育成 | (長岡 由記) |
| 1-7) 算数・数学科における学びのつながりをめざした授業改善 | (渡邊 慶子) |
| 1-8) 滋賀県における幼児の運動能力に関する研究 (2019 年度) | (奥田 援史) |
| 1-9) 滋賀県高等学校部活動における指導者リーダーシップに関する調査研究 | (奥田 援史) |
| 1-10) 子どもが自分の考えを表現し合うことを通し、主体的に課題解決に取り組む授業をめざして | (畑 稔彦) |
| 1-11) 中学校に設置された通級指導教室における指導・支援のあり方について | (窪田 知子) |
| 1-12) 理科指導力向上研修の企画研究 ～小学校理科 観察実験指導コツを学ぶ～ | (糸乗 前) |
| 1-13) 理科指導力向上研修の企画研究 ～苦手分野から応用まで～ | (徳田 陽明) |
| 1-14) 生徒が主体的に学び、確かな学力を身につけるための学習指導 | (畑 稔彦) |
| 1-15) チームで考える授業づくりⅡ「若手・中堅教員を育てる教材開発プロジェクト」 | (新関 伸也) |
| 1-16) 鑑賞学習ルーブリックを活用した授業実践に関する研究Ⅱ | (新関 伸也) |
| 1-17) 特別支援学校における音楽づくりの授業開発プロジェクト (2) | (林 睦) |
| 1-18) 通級指導教室等の子どもに対する協調運動面の指導に関する実践的研究 (3) | (川島 民子) |
| 1-19) 学力向上プロジェクト | (畑 稔彦) |
| 1-20) 石山っ子わくわく親子で畑体験隊 | (森 太郎) |
| 1-21) 地域の伝統野菜の栽培を核としたカリキュラム・マネジメントモデルの開発 | (森 太郎) |
| 1-22) 学校アート化計画 『グリーンちゃんがやって来た』 | (藤田 昌宏) |

2	教員養成実践力アップ事業	43
	石山プロジェクト	
3	出前講座	45
4	教職探究講座	54
5	教育臨床研究	56
6	情報教育研究	59
7	教育実習支援（その1）	61
8	教育実習支援（その2）	63
9	キャリア支援の取り組み	65
10	業務報告	67

1-1) 研究員派遣による学校支援に関する研究 (理科)

1. 事業名および担当者

事業名は、滋賀県の理科教育に関する実践的研究であり、担当者は以下のとおりである。

教育学系：藤岡達也（代表）

滋賀県総合教育センター：不破徹也(係長)， 多田尚平（研修指導主事）， 田中美甫（研究員）

近江八幡市立八幡小学校：藤居智子，瀬津朋也，安田章子（教諭）

野洲市立三上小学校：門坂エリ，三村咲嬉，岩見一樹，松尾朋弥，渡辺直（教諭）

2. 事業の目的

今年度は「問題解決の力の育成を目指した小学校の理科の授業づくり」をテーマに挙げ、県内の２校の小学校の協力をもとに、児童が理科の見方・考え方を働かせるための指導の充実をねらいとした。つまり、例年のように学校を超えたプロジェクトチームをつくり、共同で実践に取り組むのではなく、近江八幡市立八幡小学校と野洲市立三上小学校の中で課題解決に向けた方向性を探るものであった。

方法としては、従来と同様に指導案に基づいた実践授業を複数回行なう。特に新学習指導要領のねらいを踏まえた授業の改善を追究し、児童の問題解決能力を意図し、授業を該当する小学校の教員間で共有する。また、本研究での成果は、教育センター及び関係教員・所属学校だけでなく、広く県内外に紹介し、本県の理科教育の振興につながるように配慮する。

3. 事業の概要

本研究では、令和2年度から小学校において、新学習指導要領が全面実施となる背景を踏まえて、問題解決の力の育成を目指した授業づくりの実現のために、問題解決の力を系統的に整理し、それを基に、各学年での達成基準を作成することを主眼として取り組んだ。達成基準を設定することによって、児童を的確に見取ることや児童が理科の見方・考え方を働かせて学習するための工夫を重ねた。

[illegible]

本研究では、学習者が問題解決をするための力を育成するためには、個々の児童の現状を指導者が的確に理解する必要があるという認識に立って研究が進められた。本研究において、校内研修等で、担当教員が共通の認識を持ち、さらには児童が自分の理解の段階がどこにあるのかを掴むことができるように4段階の「達成基準」が検討された。

理科の見方・考え方と言っても、「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」のそれぞれの領域によって捉え方が異なる。「エネルギー」では量的・関係的な視点、「粒子」では、質的・具体的な視点、「生命」では、共通性・多様性の視点、「地球」では、時間的・空間的な視点を問題解決の基本的な見方としたが、これは学習者だけでなく、指導者にとっても、領域ごとに異なった見方をするのは必ずしも容易ではない。特に身近な地域をテーマとしても学習指導要領の取扱い範囲では限界があった。

<総合教育センターにおける研究発表及び課題について>

2月14日には研究協力校の教員も参加し、2年間派遣された研究員の最終発表が行われた。令和2年度から全面実施となる新学習指導要領では、これからの時代を踏まえ、理科についても新たな学びが求められている。今回は本稿で述べたような達成基準について確立されたが、課題解決の前に必要な課題発見、それぞれの学びの段階における教員側の働きかけについての観点は継続的な課題である。教員側の授業づくりの課題として、「結果」「考察」「まとめ」の流れがうまくできない、日常生活につなげたいが、つながらない、指導と評価の一体化が困難である、思考プロセス掌握のための確認時間や方法などが不十分という、担当教員の悩みも明確になった。具体的な授業の構築の中でこれらの解決が求められる。



4. 今後に向けて

これまでの小学校段階の授業実践を見ても、子供たちは理科に対しての興味・関心は高く、授業の理解度も他の教科以上に高いと言える。しかし、中学校になれば、小学校と逆転して、理科に対する理解度、興味・関心すら低下する。これは、滋賀県に限ったことではない。実は小学校高学年段階からその兆しは見えるのである。中学校以降、理科の授業の中で目に見えない現象等に対して、数式やモデルを用いるなど、抽象的な思考になると、思考・判断・表現が弱くなるのは事実である。小学校段階からの実験・観察時にでもこのことを踏まえたり、考慮したりする取り組みは今後一層求められる。

また、本稿でも記したように、一口に理科的な見方・考え方と言っても領域によって、様々なケースがあり、それについても指導者は理解する必要がある。しかし、働き方改革とは矛盾するような子供たちへの見取りの時間が求められる現状がある。この解決においても「達成基準」は効果が期待できる。

今回の実践的研究は、対象となった2校だけでなく、滋賀県の学力向上にも関連することであり、研究員が交代しても今後の継続的な取組に期待したい。

(藤岡 達也)

1 共同研究事業

1－2）滋賀県学校安全教育推進プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名は滋賀県学校安全教育推進プロジェクトであり、担当者は以下のとおりである。

教育学系：藤岡達也（代表者）

滋賀県教育委員会保健体育課：永井泉（主幹）

滋賀県教育委員会保健体育課：伊部学（指導主事）

近江八幡市教育委員会学校教育課：上田高也（指導主事）

守山市河西小学校：堀道雄（教諭），栗東市立大宝東小学校：橋本三左（教諭）

2. 事業の目的

本事業は、滋賀県における学校防災を中心とした学校安全を推進するための教育内容，方法，さらにはそのシステムについて，学校安全に関連する県内市町の事例収集・分析等をもとに各学校への指導・支援を通して実践的に構築するものである。本年度も教職大学院学校経営力開発コースの学校安全や防災教育などの授業科目と連動した「地域協働実習Ⅰ・Ⅱ」の一環としても地域連携の強化を図った。

3. 事業の概要

滋賀県では昨年度に引き続き，自然災害対応だけでなく，県内で発生した事件・事故災害を踏まえて，交通安全や不審者対応等の生活安全などの確立が一層求められた。昨年までの調査研究や新たな実践を踏まえ，県教育委員会事務局保健体育課，近江八幡市教育委員会学校教育課，彦根市教育委員会保健体育課等と連携し，滋賀県内の学校安全の推進・啓発を進める。具体的には地域の機関等と連携した災害安全（防災），生活安全（防犯を含む），交通安全の内容，指導法について，継続的に実践的な取組を行なう。滋賀大学にとっても，教職大学院に所属する派遣された現職教員に対する「地域協働実習」の場として学校安全や防災教育に関する実習の場として位置付けられたが，それらも定着しつつある。



4月に実施される「学校管理職トップセミナー」では、今年度も本学教職大学院「経営力開発コース」の5名の現職教員が教育委員会との連携のもと、研修の設定や当日の運営等を学ぶことができた。本学に派遣された管理職候補者が、管理職にどのような内容の研修が求められ、教育委員会はどのように運営するのかを直接意識したりすることが可能となる。また、11月に開催された「学校防災教育コーディネーター講習会Ⅰ」（前ページ、写真左）や6月と2月に開催された「滋賀県子どもの安全確保に関する連絡協議会」（前ページ、写真右）等にも同様に出席し、県下の学校安全の現状と課題についても明確にした。近江八幡市、守山市においては、避難訓練や教科と学校安全の取組について、その実証的な検証を行った。各学校レベルの実践においては、市教育委員会との連絡の下、地域の危機管理課や消防署、さらには地域の自治会やコミュニティセンターと連携した活動もこちらがアドバイスするだけでなく、地域の具体的な実態を学ぶ点で重要な意味があった。教職大学院で、「学校危機管理」や「学校安全」等の進め方を検討する中で、滋賀県の事例分析として取扱うことができたのは、本学にとっても意義は大きかったと考えられる。



滋賀県は文科省の「学校安全総合支援事業」に採択されており、近江八幡市は県のこの事業の一環として取り組んでいる。写真（左）は、1月に避難訓練が実施された同市桐原東小学校での様子である。まず、休憩時間中、突然の緊急地震速報によって、児童は避難の対応を考え、行動する。その後、地震が収まったと仮定して運動場に集合し、点検を受け、学校長が全体を指導する。この避難訓練及び当校の学校安全について、自分がコメントし、今後の避難訓練、学校安全の改善を図る。

また、写真（右）は守山市河西小学校での教科と防災教育とを連動して行った授業の一環である。「総合的な学習の時間」の中で実施したが、今後、新学習指導要領のねらいに沿って、「カリキュラムマネジメント」の観点からもプログラム等を開発し、実践、改善のPDCAサイクルが重要となる。

4. 今後に向けて

本年度も国内各地において、様々な自然災害や事件・事故が発生した。滋賀県においても防災教育を含む学校安全、学校危機管理は喫緊の課題であり、学校、教育行政、地域と一体となった取組は、本学にとってもこれからの新たな課題である。と言うのは、本学の教職大学院でも「学校安全・防災教育」等の授業は今日重要な意味を持ち、今後も県の教育行政や学校と連動した活動が求められるからである。

（藤岡 達也）

1 共同研究事業

1-3) プログラミング教育プロジェクト研究

1. 事業名および担当者

本事業は、滋賀県総合教育センターの「プログラミング教育プロジェクト研究：教科等における学びとプログラミング教育を有機的につなぐ授業づくりープログラミング教育サポートパックの開発を通して」の研究事業において、理論的・実践的な側面より専門的知識等の提供や指導助言を行うに当たり、松原研究室との共同研究として位置づけられるものである。

その組織と役割分担との関係は、表1の通りである。なお、松原は、滋賀県総合教育センターの「プログラミング教育プロジェクト研究」におけるトータルアドバイザーである。

表1. 共同研究事業の組織と役割分担

協同研究事業の組織	役割分担
松原研究室 (滋賀大学教育学部・ 滋賀大学大学院教育学研究科)	担 当 者：松原伸一 (滋賀県総合教育センター，トータルアドバイザー) ・プログラミング教育における専門的な知識・技術の提供 ・サポートパックの開発に関する指導助言 ・その他，本事業のトータルアドバイス
プログラミング教育 プロジェクト研究 (滋賀県総合教育センター)	担 当 者：小林高章（滋賀県総合教育センター 研究員） 専門委員：喜田憲恵（滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課指導主事） 研究委員：戸島将志（愛荘町立愛知川東小学校 教諭） 瀧上純平（長浜市立杉野小学校 教諭） 藤本義人（大津市立中央小学校 教諭） 西村友佑（日野町立西大路小学校 教諭） 岡田直也（東近江氏立能登川東小学校 教諭） 布施明朗（守山市立吉見小学校 教諭） 他に同センターの関係者数名 ・本研究事業の企画・推進・評価を行う。

2. 事業の目的

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編（東洋館出版）では、プログラミング教育にあたっては、

第3章 教育課程の編成及び実施

第3節 教育課程の実施と学習評価

1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

(3) コンピュータ等や教材・教具の活用，コンピュータの基本的な操作やプログラミングの体験

として位置づけられ、2020年度からプログラミング教育が必修化された。

つまり、小学校では、児童がプログラミングを体験しながら、コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身に付けさせるための学習活動を行うことになった。

そこで、本事業の目的としては、研修と実践の往還の中で、プログラミング教育サポートパックの開発を通して、教科等における学びとプログラミング教育を有機的につなぐ授業づくりを行うことである。

3. 事業の概要

本事業の概要は、研究協力校（滋賀県内の各小学校）において、プログラミング的思考（自分が意図する一連の活動を実現するために、どのような動きの組合せが必要であり、一つ一つの動きに対応した記号を、どのように組み合わせたらいいのか、といったことを論理的に考えていく力）を育むための活動を行う。

そこで、本事業に関係して協力・実施した項目は下記の通りである。

(1) プログラミング教育に関する調査及びその分析・整理 … [松原研究室]

松原研究室におけるこれまでの研究成果をもとに、既に蓄積した知識・情報を整理・分析し、プログラミング教育を小学校段階に導入するための理論的な側面から支援を行った。その主な内容は、次の通りである。

①小学校におけるプログラミング教育とその教育的意義

②情報メディア（ICT）の活用の在り方

(2) サポートパックの作成に対する開発支援 … [松原研究室]

サポートパックの作成にあたり、重要事項を整理して、適宜、評価を行い、利用しやすい形態にするための支援を行った。その主な内容は、下記の通りである。

①プログラミング教育における題材

②プログラミング教育における教材化とその評価

③その他、プログラミング教育の支援（サポート）に関する諸事項

(3) 授業実践 … [滋賀県総合教育センター，専門委員，研究委員，協力校，松原研究室]

考案された各支援内容は、サポートパックとして整理し授業実践にて活用し、評価を行った。

4. 今後に向けて

プログラミング教育サポートパックは、小学校段階にて必修となった学習内容（方法）を提供できる有効な手段である。今後は、サポートパックを活用したプログラミング教育の支援や普及に際し、Webサイトの充実や広報などが求められるとともに、さらなる次のステップへと進めていく必要がある⁽¹⁾。

以上を踏まえ、筆者は、感性に響く情報メディア教育を構想している、学習指導要領の主旨だけでなく、その背景となった諸課題についても研究を進めていく必要がある⁽²⁾。

参考文献

- (1)松原伸一：人間性に回帰する情報メディア教育の新展開－人工知能と人間知能の連携のために－，開隆堂，pp.1-128（単著），2020.
- (2)松原伸一：芸術とコンピュータ，DTMとしての曲作りの第一歩として，情報学教育研究，第11号（通算16号），pp.37-40，2020.

（松原 伸一）

1 共同研究事業

1-4) 外国語プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名、及び担当者とそれぞれの役割は次のとおりである。

(1) 事業名

『外国語プロジェクト研究』

「外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指した小・中学校の学びを円滑に接続する授業づくりー外国語教育における系統性を踏まえた指導と評価を通してー」

(2) 担当者・役割

田中妃登美（滋賀県総合教育センター）(研究統括)

中川恵実子（滋賀県総合教育センター）(事業統括，研究統括支援)

山本 毅 （滋賀県総合教育センター）(事業統括，研究統括支援)

川上耕平 （米原市立柏原小学校）(実践研究・授業検証)

竹林江理 （彦根市立城西小学校）(実践研究・授業検証)

北村隆晃 （米原市立稲枝東小学校）(実践研究・授業検証)

藤川直子 （米原市立伊吹山中学校）(実践研究・授業検証)

松本 悠 （彦根市立西中学校）(実践研究・授業検証)

大嶋秀樹 （滋賀大学）(研究支援)

2. 事業の目的

本事業の目的は次のとおりである。

(1) 目的

令和2年度からの小・中・高・特別支援学校での改訂学習指導要領にもとづいた新教育課程の順次の実施を控え、外国語（英語）教育における「学びの系統性」を踏まえた、小・中学校の児童・生徒の英語の学びを滑かにつなげる授業づくりに向け、指導と評価が一体となった授業計画とそれにもとづいた授業実践を1年間をかけて研究することで、児童・生徒の英語によるコミュニケーションの資質・能力の育成に資することを目的とする。

3. 事業の概要

本事業は、本学教育学部の地域教育研究支援事業として、滋賀県総合教育センターが所轄する令和元年度の事業、『外国語プロジェクト研究』を支援したものである。

実施した事業内容、その成果・発信の概要は次のとおりである。

(1) 合同研究会

研究にあたっては、年間5回の合同研究会を開催した。うち、3回の合同研究会は、滋賀県総合教育センターで5月、7月、10月にそれぞれ開催し、2回の合同研究会は、小学校（米原市立柏原小学校）、中学校（彦根市立城西小学校）で、6月と10月に研究授業と授業研究会とあわせて実施した。

(2) 実践研究会

実践研究と授業検証を目的に、夏と秋にのべ8回、実践研究の機会をそれぞれの小・中学校（米原市立柏原小学校、彦根市立城西小学校、米原市立稲枝東小学校、米原市立伊吹山中学校、彦根市立西中学校、）で、研究業と授業研究会として開催した。

(3) 研究発表会

1年間をかけて行ってきた研究成果は、研究統括者の田中が中心になり、資料としてまとめ、その内容は、令和2年2月14日開催の滋賀県総合教育センター「第62回研究発表大会」で発表・報告した。研究発表会は、午前と午後の2部構成で行われ、1年間の研究の成果が、滋賀県の小・中・高・特別支援学校教職員、滋賀県内外の教育行政や英語教育関係者を迎えて、披露された。

(4) 研究の成果と発信

1年間をかけての研究の成果は、研究統括者の田中が、「外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指した小・中学校の学びを円滑に接続する授業づくりー外国語教育における系統性を踏まえた指導と評価を通してー」という題目で、実践研究論文としてまとめ、滋賀県総合教育センターのホームページから、<http://www.shiga-ec.ed.jp/www/contents/1580191035212/index.html> で公開されている。

4. 今後に向けて

本事業は、地域の教育研究機関である滋賀県総合教育センターの先生方が主体となって、滋賀県の小・中学校の現職教員の先生方と一緒に、令和2年度からの小・中・高・特別支援学校での新教育課程の順次の実施を目前に控えての、外国語（英語）教育における「学びの系統性」を踏まえた小・中学校の児童・生徒の英語の学びを滑かにつなげる授業づくりを、指導と評価の一体性の担保という視点から、児童・生徒の英語によるコミュニケーションの資質・能力の育成を図ることを目的に進めた研究である。1年間の先生方の研究が、これからの英語教育の先鞭となって、滋賀の地域の児童・生徒のみなさんの学びの充実、滋賀県の小・中学校の先生方の教育の充実に資することを願っている。

（田中 妃登美・中川 恵実子・山本 毅・大嶋 秀樹）

1－5) 科学的に探究するために必要な資質・能力の育成をめざした 高等学校理科の授業改善

1. 事業名および担当者

事業名：理科教育に関する研究

「科学的に探究するために必要な資質・能力の育成を目指した高等学校理科の授業改善Ⅱ」

－パフォーマンス課題による探究的な学習の実践と多面的・多角的な評価の工夫－

担当者：滋賀県総合教育センター研究員 中川 聖良，滋賀大学教育学部 加納 圭

2. 事業の目的

高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説理科編・理数編では、「思考力，判断力，表現力等を育成するに当たっては，自然の事物・現象の中に問題を見だし，見通しをもって観察，実験などを行い，得られた結果を分析して解釈するなどの活動を行うことが重要である」とし，探究的な学習活動をより一層充実する必要があると示されている。また，学習評価については，「単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して，学習の過程や成果を評価し，指導の改善や学習意欲の向上を図り，資質・能力の育成に生かすようにすること」が求められている。これらのことと課題の設定が困難である現状から，本研究では，パフォーマンス課題を取り入れ，学習評価については多面的・多角的な評価となるよう工夫し，探究の過程の充実に向けた指導と評価のあり方を探ることで，高等学校理科の授業改善を図り，科学的に探究するために必要な資質・能力の育成を目指す。

3. 事業の概要

(1) パフォーマンス課題による探究的な学習活動の工夫

本研究におけるパフォーマンス課題とは，身に付けた知識や技能を総合して使いこなすことを求めるような課題をいう。個々の知識や技能を幅広く身に付けておくだけでは実際の生活の中で活用できるとは限らない。パフォーマンス課題に取り組むことで，知識や技能の定着を図り，日常生活に活用できるようになることを目指す。パフォーマンス課題は，日常生活と学習内容とが関連付けられるものにし，課題を解決する必要性が感じられるものを設定することで，生徒に探究の動機付けをする。そして，探究のそれぞれの過程において，生徒が理科の見方・考え方を働かせながら解決に向けて取り組むことで，学びを深めていく。そのような学びを深める構成とするために，単元を貫き，その単元で何を身に付けるのかを明確にした問いを「本質的な問い」として，設定した。

(2) 多面的・多角的な評価の工夫

探究的な学習活動全体を通して，「探究ノート」「ループリック」「評価シート」を活用することで，生徒を様々な角度から捉える多面的・多角的な評価を実践した。「探究ノート」は，自分の考えをもち，それを基に対話を進めることを重視し，自分の考え，グループやクラス全体の考えを区別して記入するものである。考えの変化，観察・実験の結論も記入することで，探究の過程を振り返ることができるようにした。「ループリック」は，学校や生徒の実態に合わせながら，ペーパーテストでは測ることが難しい探究する姿勢を含めた達成基準を作成した。「評価シート」は，観察・実験に取り組みながら学習状況を

把握することを容易にするシートで、実験室の座席配置を基に指導者が丸を付けるだけで記録可能なものとした。

(3) 科学的に探究するために必要な資質・能力の育成を目指した授業改善

化学基礎における「化学と人間生活」の単位において、しょう油を題材にしたパフォーマンス課題、「物質の変化とその利用」の単位において、発泡性入浴剤を題材にしたパフォーマンス課題を設定した。

しょう油を題材にしたパフォーマンス課題では、化学基礎の最初の単位であることから、探究的な学習の入口である「仮説の設定」に重点を置き、取り組んだ。身近な物質を取り上げ、この単位において学習している混合物の分離の方法と既習

仮説	②
【選択肢】 ① 濃口>薄口>減塩 ② 薄口>濃口>減塩 ③ 濃口=薄口=減塩 ④ 濃口>薄口=減塩 ⑤ 濃口=薄口>減塩	料理に使う時、できるだけ色がつかないように 少しの量で済むように、薄口は、食塩が多く 含まれているのではないかと考えた

図1 生徒が設定した仮説

の知識や技能を総合して使いこなし、知識や技能の定着を図るものとした。仮説の設定の際には、選択肢を設けることで自分の考えをもつことを促した。また、選択肢を設けることで、自分自身の考えになかった仮説に触れることになり、仮説に対する根拠を明確にしようとする姿が見られた(図1)。

発泡性入浴剤を題材としたパフォーマンス課題では、実験結果をまとめた表やグラフを読み取り、「考察・推論」に重点を置き取り組み、化学反応における量的な関係について考察する展開とした。図2に示すように、第2時において、クエン酸を1.0gで一定とし、炭酸水素ナトリウムを1.0gずつ増量させ泡の発生量を測定した実験結果より、化学反応に関わる物質には量的な関係があることを考察する生徒の姿が見られた。また、第3時では、炭酸水素ナトリウムの質量を1.0gから2.0gまで変化した時の泡の発生量が増加している部分について、検証実験を行った。ここでは、化学反応の全体を大まかに見定めたうえで、詳細を明らかにするという観察・実験の手法を習得したとする生徒の記述もうかがうことができた。

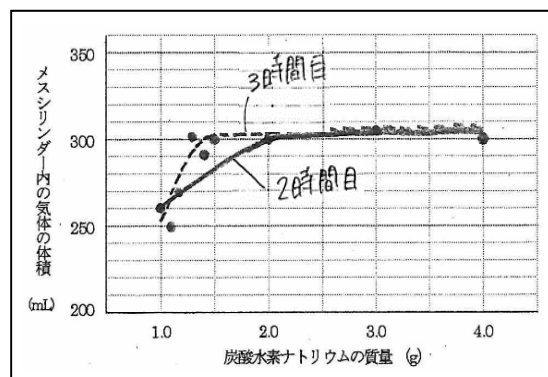


図2 「探究ノート」における実験結果の記述

4. 今後に向けて

学校や生徒の実態に応じて、探究の過程のどこに重点をおくかを絞って実施することにより、どの高等学校に対しても実施可能で科学的に探究するために必要な資質・能力の育成に向けた探究的な学習活動を示すことができた。また、身の回りの事物・現象を題材にすることにより、日常生活における現象を科学的に見ること、考えることができるようになり、探究の過程を踏まえた学習活動を充実させることができた。学習評価については、学校や生徒の実態に応じたルーブリックを到達目標として示すことで、目指す姿が明確になり、主体的に取り組む姿勢が見られた。その取組を繰り返すことで、生徒は自己の変容を自覚できるようになった。今後、これまで取り組んできた化学基礎、生物基礎に続き、物理基礎や地学基礎においても、科学的に探究する学習活動の充実を図る必要がある。

(中川 聖良・加納 圭)

1－6) 書くことで自分の学びを豊かにすることができる子どもの育成

1. 事業名および担当者

事業名は「書くことで自分の学びを豊かにすることができる子どもの育成」であり、担当者は以下の通りである。

甲賀市教育研究所：福永 佐栄子(所長)，田中 由紀子(研究員)

教育学部：長岡 由記(学部教員)

2. 事業の目的

本事業は、主体的に学び合うことのできる国語科授業をつくるために、学習者が学ぶ目的意識をもって対話的な学習に取り組み、自分の学びを書くことを通して自覚化できるようにすることを取り入れた授業を計画・実施し、発話分析を中心とした授業分析を行うことで授業改善のための要点を明らかにすることを目的とする。これまで本研究では、子どもたちの多様な考えを引き出し、課題意識をもって主体的に学ぶ子どもの姿を目指し、教師集団による発話記録をもとにした授業分析を行いながら、学びのつながりを生かした授業改善を行ってきた。そこで、これまでの本研究の成果を踏まえて、本事業は、「読むこと」における「考えの形成」を視点にして、自分の思いや考えを書いて学びを広げ、深められる授業づくりを探究することを目的とする。そのために、本年度前期では、児童が意見や思いを出せるような授業づくりについて考え、後期ではそれをもとに研究授業を行い、先の暫定的方法を修正する。後期の授業研究会には学生も参加し、小学校国語科授業の実際と児童の実態についての見識を深めるとともに、授業づくりと授業分析の手法を実践的に学ぶ機会とする。

3. 事業の概要

5月14日	研究の目的・内容の確認	10月17日	研究授業Ⅰ（第5学年）
7月26日	授業検討会，学習指導案の検討①	10月31日	研究授業Ⅱ（第6学年）
8月2日	授業検討会，学習指導案の検討②	11月7日	研究授業Ⅲ（第4学年）

研究授業Ⅰ：めざせ！プレゼン名人～グラフや表を用いて説得力のある意見文を書こう～

(教材名「天気を予想する」「グラフや表を用いて書こう」光村図書5年)

本単元で付けたい力は、「筆者の論の進め方と図表などを結びつけて、原因と結果など情報と情報との関係について理解しながら必要な情報を見付けたり、その効果について考えたりすることができる力」と、「図表やグラフを用いて、自分の考えが伝わるように工夫して意見文を書くことができる力」である。主な単元目標は、「原因と結果等の関係について理解し、文章中での図表等の役割を捉え、それらを結び付けた論の進め方について考えることができる」である。本時は、全13時間の10時間目の授業であり、目標は「自分の意見文の改善点のアドバイスをもらったり、友達の文章の工夫点や改善点を具体的に指摘したりして、自分の意見文に生かすことができる」である。

前時までに、児童は自分の意見文の「お悩みメモ」を記している。また友だちの意見文を読んで良かったところとアドバイスを書く活動を行っている。それらを踏まえて、本時ではグループで意見文の感想を伝え合ったり、「お悩みメモ」について話し合ったりすることを通して改善ポイントについて検討

を行った。良かったところで多かったのは、例の分かりやすさと資料の説明の詳しきである。アドバイスで多かったのは、表記上の誤りと話題が急に転換している箇所に対する指摘である。グループでは主に書き方について話し合われていたが、「お悩みメモ」には「説得力に自信がない」というコメントもあり、読み手がどのように感じたのか、また主張に納得できたのかについての関心も高かった。

研究授業Ⅱ：作品の魅力を伝えよう～おすすめ！宮沢賢治ブックリスト～

（教材名「やまなし」「イーハトーヴの夢」光村図書6年）

本単元で付けたい力は「作品の中で使われている表現を味わい、優れた叙述について自分の考えをもちながら読むことができる力」と「作品の特徴や作者の思いを捉え、宮沢賢治作品の魅力を伝えることができる力」である。主な単元目標は、「物語の全体像や作者の思いを想像したり、表現の効果を考えたりして、宮沢賢治作品の魅力について自分の考えをまとめることができる」である。本時は、全11時間の10時間目であり、目標は「自分が選んだ本の魅力について、友だちと意見や感想を交流し、宮沢賢治作品の魅力についてブックリストに書くことができる」である。

まず、魅力を見付けるための観点を「表現面」と「内容面」に分類して確認し、その後グループごとに決めた観点から作品を読み直してその魅力について話し合っまとめる学習が行われた。最後に、教室全体でそれぞれのグループが見付けた作品の魅力を共有した。児童は、主に登場人物の性格や台詞、設定の面白さ、場面の切りかわりや話の結末に魅力を感じていた。本単元を通して、児童は「やまなし」をはじめ多くの宮沢賢治作品を、他の作品にも汎用可能な魅力を見付けるための「種」を見出しなが読み進め、また友だちと話し合っさらに魅力を共有する楽しさを味わっていた。一人一人が感じた作品の魅力はそれぞれの言葉で綴られ、「宮沢賢治ブックリスト」にまとめられている。

研究授業Ⅲ：兵十にごんぎつねのことを伝えよう～ごんは〇〇〇なきつねだよ～

（教材名「ごんぎつね」光村図書4年下）

本単元において付けたい力は、「登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、物語全体を通して具体的に想像する力」と「文章を読んで、感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付く力」である。主な単元の目標は、「登場人物の性格や場面の展開に沿って変化していく登場人物の気持ち、関係などを押さえ、叙述を基に想像しながら読むことができるようにする」である。本時は全12時間の8時間目の授業であり、主な目標は「物語全体を見通して、「兵十」に一番伝えたいことを決めることができる」である。

授業では、本時のめあてを共有した後に、1～6場面までに読み取ってきたことを基に一人一人が掲示用の短冊に「ごん」はどんなきつねなのかを書く活動が行われた。児童は、これまで書き溜めてきたノートの記述も参考にしながら、「村人のことをよく知っているごん」や「ひとりぼっちのさみしさを知っているごん」など、「ごん」のことが分かる端的な表現を考えて書きこんでいた。その後、どこからそう思ったのかを叙述をもとに具体的に考えていく学習が教室全体で行われた。

4. 今後に向けて

授業で取り入れられた書く活動は、自分の考えたことやその書き表し方を自覚したり、他者がどのように感じているのかを共有したりすること、またそれらを基により良いものを追究したり新しい発見をしたりする上で重要な活動であった。書いたものを基に話し合う際には、その目的を明確にし、児童にとっての必然性とその効果について検討をした上で位置づけていくことが今後の課題である。

（長岡由記・田中由紀子）

1－7) 算数・数学科における学びのつながりをめざした授業改善

1. 事業名および担当者等

事業名は、「算数・数学科における学びのつながりをめざした授業改善—子どもが自ら学び、表現し、ともに深め合う授業づくり—」であり、担当者等は次の通りである：

〔連携先機関〕 甲賀市教育研究所，〔連携先担当者〕 松尾圭三（甲賀市教育研究所・課長補佐）

〔大学担当者〕 渡邊慶子（学部教員）

2. 事業の目的

本事業の目的は、「問題理解」研究を背景にした教材や授業展開に関わる研究を通して、子どもたち自身の考えを数学的に表現させる意義と方法を明らかにすることであった。これまでわれわれは、予習を活かした算数・数学科授業の改善とそのための教材開発をしてきた。結果として、予習・家庭学習が子どもの主体的な学習態度や探究的な授業の実現に貢献することを明らかにしてきたが、一方で、数学的根拠をもとに自分の考えを説明する子どもの力を育成することについては課題が残されていた。この課題に関して「問題理解」のための数学的対話が必要であるという新たな仮説も明らかにした。

そこで、本事業では、子どもたちの考えを数学的に表現する意義と方法について、「問題理解」研究を背景にした教材や授業構成原理に焦点を当てて探究した。この際、「問題理解」研究を推進している本大学の院生 1 名を研究チームに加えて甲賀市と大学の連携事業を進め、同市の授業研究体制の枠組み（特に授業データの保存・共有の充実）をより良いものに構築し直すことも事業の目的とした。

3. 事業の概要

（1）「こうか授業術5箇条」を超えて—「問題理解」研究への着眼—

甲賀市では平成 28 年度より教員にむけて「こうか授業術 5 箇条（こどもとめあて共有[問題理解]／うんと考えひとり学び[解決の構想・自力解決]／かんがえつなげて話し合い[集団解決]／じゅ業のまとめと振り返り[振り返り]／つなげる課題の提示）」のサイクルを取り入れた授業展開を推奨してきた。本年度は、この授業サイクルを質的に高めるための数学的表現（数・図・ことば・式・表など）に着目して授業がつくられ、小・中学校において実践された。

（2）授業研究

本研究は、研究組織全体による「教材研究会」を実施したことに加えて、次の日程で授業実践が計画され、その日程に合わせて教育研究所のスタッフ（主に上記連携先担当者）と授業実施者が打ち合わせをして授業が実施されている。その各々の授業後に授業検討会が行われ、大学担当者や院生も参加した。さらに、適宜「研究推進委員会」が開催され、研究全体について遂行状況が報告されたり、微調整されたりしている。これらの研究活動は次の日程で行われた（甲賀市教育研究所，印刷中）：

月	研究実践（□教材・授業の事前検討など／■授業実践・事後検討会）／◎委員会など
2019 年 4	◎研究の構想／◎研究推進計画の立案
5	□子どもの意識調査／□事前授業「角度(小4)」「体積(小5)」 「連立方程式(中2)」／◎研究推進委員会(1)

1 共同研究事業

6・7	□事前授業「分数のかけ算(小6)」
8	□学習指導案検討会(教材検討会)／◎研究推進委員会(2)(3)
9・10	■「分数の加減(小5)」(2回) ■「場合の数(小6)」
11	■「面積(小4)」 「一次関数(中2)」 ^{【※】} 大学院生によるデータ収集・分析・考察
12	□子どもの意識調査の分析
2020年1・2	◎研究推進委員会(4)：研究の総括
3	◎研究紀要の発行と配布

(3) 大学院生を加えた共同研究活動の実際

本事業における大学院生との連携は、特に2019年11月29日にT中学校第2学年でN教諭によって実施された「一次関数」の授業(右図)で際立って行われた。この授業は平成31年度実施の「学学調査(数学)」で出題された問題の改題を教材にしており、授業の構想段階で教師が全国的調査の問題を教材化する方法を探る必要があった。この点で、教師の内容知と指導知の育成のための具体的な取り組みを含む研究授業であったといえる。

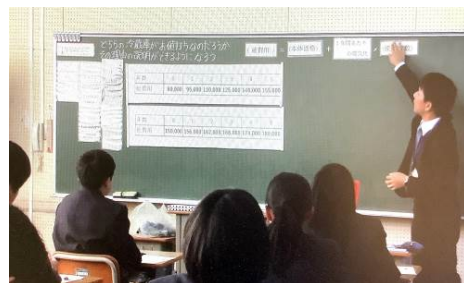


図 N 教諭の授業の様子

この授業研究は次の①～④の通り行われた：〔①教材研究・教材づくり〕N 教諭・連携先担当者・学部教員並びに大学院生の3項によって、教材の数学的特徴、教材に対する生徒の認識、「学学調査問題」を用いた授業実践などについてメール等による意見交換がなされた。〔②授業計画〕N 教諭・連携先担当者の連携により授業が計画された。〔③授業実践〕2台のビデオカメラで記録された。〔④授業分析〕学部教員並びに大学院生により、動画に基づく質的分析法で考察された(大学院生は現在も継続中)。

2020年1月末日までに行われた分析結果の概要は、学部教員によって2月に開催された研究推進委員会で連携機関並びに関係者に公表された。その際、「中学校数学における関数の定義」とその表現(式表現による定義)に関する数学教師の内容知を主軸として授業をつくる重要性が主張された。また、式表現を重視していく方向に問題が理解されていく授業プロセスは、数学的表現の変化(日常言語→数の変化[表]→図的[グラフ]表現→数の対応[式])として授業展開に反映され得ることが明らかになった。結果として、数学的表現の研究においては「一つの単語(用語)で簡潔に表す」ことを重視するのではなく、一つのアイデアや対象に対する「生徒の表現の変移」に着目すべきであると提案できる。

4. 今後に向けて

本事業の大きな成果は、大学院生を加えた共同研究を実施したことによって、授業分析をより学問的かつ詳細に行うことができ、その過程で生じる議論や得られた成果を授業実践者並びに連携機関と共有できたことであった。今後は、共同研究組織の一層の充実を図り、教員の教材研究力、授業構想力、並びに授業実践力の向上を具体的に推進していける組織づくりが望まれる。この際、連携機関、授業実施者、大学(学部教員・大学院生)の3項を結んだ遠隔会議システムなども取り入れて、迅速かつ充実した議論を展開するための環境整備も必要となろう。

引用・参考文献

甲賀市教育研究所(印刷中) 令和元年度 研究紀要. 第15号(算数・数学). 甲賀市教育研究所.

(渡邊慶子・松尾圭三)

1－8） 滋賀県における幼児の運動能力に関する研究（2019年度）

1. 事業名および担当者

事業名は、「滋賀県における幼児の運動能力に関する調査研究」であり、担当者は次のとおりである。
教育学部：奥田援史、滋賀県教育委員会：（主事）村部謙介。

2. 事業の目的

滋賀県内の幼稚園、保育所、認定こども園の園児（4歳児クラス及び5歳児クラス）を対象として、運動能力と生活関連要因について調査する。

3. 事業の概要

1) 実施した内容

① 調査実施園及び幼児数

滋賀県内の幼稚園、保育所及び認定こども園の129園を実施園とした。測定対象者は4、5歳児クラスの園児とその保護者であった。分析対象としたデータは8,060人分である。

③調査内容

ア) 幼児運動能力テスト

25m走（秒）、立ち幅跳び（cm）、体支持持続時間（秒）、ボール投げ（m）、両足連続跳び越し（秒）、捕球（回）の6種目を実施した。運動能力の測定については、各園で実施した。なお、実施方法に関するDVDを配布し、測定方法の周知を図った。

2) 調査結果

①幼児運動能力テストの結果について

図1は幼児運動能力テストの結果である。年々、測定値は低下傾向にある。

図1 幼児運動能力テストの結果

測定項目	男				女			
	4歳		5歳		4歳		5歳	
	平均値	平均評定得点	平均値	平均評定得点	平均値	平均評定得点	平均値	平均評定得点
25m走（秒）	7.29	2.9	6.4	3.0	7.54	2.9	6.57	2.9
立ち幅跳び（cm）	87.98	2.8	103.13	2.7	82.33	3.0	97.13	2.9
ボール投げ（m）	4.84	2.5	7.02	2.7	3.78	2.8	5.1	2.9
体支持持続時間（秒）	23.05	2.8	41.24	2.8	23.82	2.8	42.13	2.8
両足連続跳び越し（秒）	6.94	2.9	5.65	2.9	7.08	2.9	5.59	3.0
捕球（回）	4.59	2.9	6.76	2.8	4.15	3.1	6.48	3.0

4. 今後に向けて

幼児運動能力テストを滋賀県内129の幼稚園・保育所等で実施した。その結果、全体的に低下傾向がみられる。2019年度は保育所において大きな事故があったことも影響しているのか、幼児の運動能力は低い水準で推移していると考えられる。（奥田 援史）

1－9) 滋賀県高等学校部活動における指導者リーダーシップに関する調査研究

1. 事業名および担当者

事業名は、「滋賀県高等学校部活動における指導者リーダーシップに関する調査研究」であり、担当者は次のとおりである。

- ・教育学部：奥田援史。
- ・滋賀県高等学校等教育研究会・保健体育研究部会・会長／今井義尚（大津商業高校校長）。

2. 事業の目的

昨今、部活動指導者の暴力等の問題が頻発している。そこで、本調査では、高校運動部における指導者がどのようなリーダーシップを発揮しているか、またそのリーダーシップと部活動所属部員のやる気等との関連性について検討する。

3. 事業の概要

1) 実施した内容

- ・調査実施校：滋賀県立高等学校の部活動指導者72名、運動部所属部員859名。
- ・調査内容
指導者：リーダーシップスタイルに関する調査（協調的、利他的、指示的、親和的）、など。
部員：チームの状態をチーム力（集合的効力感：能力・努力・忍耐力・準備力・結束力）とチーム志向性（動機づけ雰囲気：熟達、協同、成績、評価懸念）、など。

2) 調査結果

主な結果は以下である。

- ・チームに影響を及ぼす態度として、“思慮深いかかわり”と“明確な信念”がチームの様々な側面に対して強い影響を及ぼす。
- ・自分の考えや明確な目標を明示しつつも、選手を信頼し、関わり過ぎずに待つ態度がチームの努力する状態を育む。
- ・選手の意見を聞くと同時に、自分の考えもしっかりと伝え、選手と対峙する態度が、チームの忍耐力を高める活動の責任を指導者が持つという態度であるとも考えられ、そういった態度が競技に向かう準備をチームとして高める。
- ・選手に対して指導者が受容的な態度を示すことによって、選手同士の関わり合いを促す。
- ・しかし、指導者の指示的なリーダーシップは、選手に失敗を懸念させる評価的なチーム土壌となる。

（奥田 援史）

1－10) 子どもが自分の考えを表現し合うことを通し、主体的に課題解決に取り組む授業をめざして

1. 事業名および担当者

事業名は、「子どもが自分の考えを表現し合うことを通し、主体的に課題解決に取り組む授業をめざして」であり、担当者は次の通りである。

長浜市立長浜北小学校：橘 憲照（校長）、金澤 秀太郎（研究代表、教諭）、松波 和樹（院生）
教職大学院：畑 稔彦

2. 事業の目的

本研究では、「課題解決に向け、主体的に考え合う子」、「自分自身の学びを振り返られる子」の育成をめざす。学年が変わっても、教師が変わっても、若手でも、子どもが安心して見通しを持って授業に取り組めるよう、長浜北小学校での有効な学習指導方法（北小スタンダード）を作り、型を使いながら、算数科の授業を通し授業の質の向上を図ることをねらいとする。

3. 事業の概要

主体的に学びに取り組む姿をめざして「子どもが考える時間を大切にすること」と「課題とまとめ、振り返りの一貫性」を重視する。子どもが考えを整理する時間の確保については、授業づくりを通して、問題を焦点化し解決の見通しをもてるようにすること、自分の考えをもてるようにすること、子ども同士の関わり合いの場を設定することの3点から検証していく。子どもが何を学んだのか実感できているかについては、振り返りの記述をもとに分析する。その視点は次の4点とする。

- ①自分に関すること（新しく気付いたこと、できるようになったこと、がんばったと思うこと、もっとこうしかったこと、わからないこと、自分の考えのよさ）
- ②友だちの考えと比べて（考え方のよさ、自分の考え方との違い）
- ③前の学習とのつながり（似ている所、違う所）
- ④今後やってみたいこと（〇〇のときはどうなのか、〇〇のときは△△なのではないか）

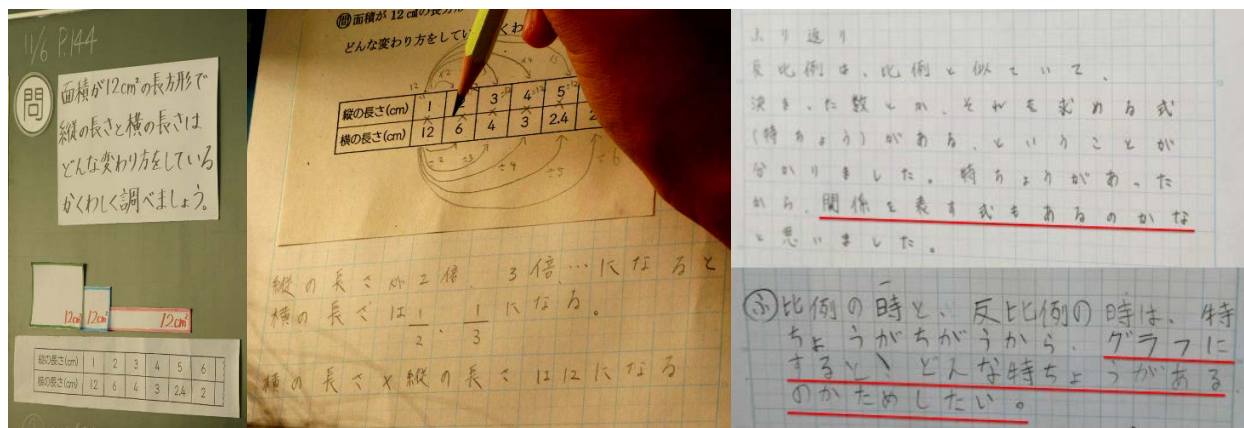
大学担当者は、以下の研究会において指導助言にあたった。

- ・第6回研究会（11月6日）：第6学年「比例と反比例」の授業研究会
- ・第7回研究会（11月20日）：第1学年「かたちづくり」の授業研究会
- ・第8回研究会（1月15日）：第3学年「植木算」の授業研究会

本稿では、実践された研究授業の2事例を示したい。

（1）6年「比例と反比例」 反比例の定義と性質

本時は、面積が12 cm²の長方形で、縦の長さや横の長さの変わり方を調べる算数的活動を通して、比例の学習をもとに反比例の定義と性質を理解する内容である（写真①）。児童から「比例とは違って～」や「比例のときと〇〇が違う」といった声が出やすいように、比例での学習の足跡を教室の側面に掲示にしておいた。また、本時を振り返る場面では、「反比例の式はどんなものだろうか」「反比例のグラフをかきたい」など比例のときの学習過程を思い出し、児童が進んで次の学習の展望を持つ手助けになることを期待した。



写真①

写真②

写真③ (下線は筆者が加筆)

授業では、比例の学習で表から変化と対応の様子を調べたことを生かして、面積が12cm²の長方形の縦の長さと横の長さの関係についても調べることができていた(写真②)。どの児童も解決の見通しをもって課題に取り組んでいたことがわかる。振り返りの記述については、「比例はxが2倍、3倍、…になると、yも2倍、3倍、…になっていたけど、反比例は、xが2倍、3倍、…になると、yは1/2倍、1/3倍、…になっている。」というように黒板のまとめを使いながら反比例の定義や性質を書いている児童が多く見られた。その一方で、中には写真③のように次の学びについての記述も見られ、授業者が期待していたような、新たな「考えることの楽しさ」につながるきっかけを生み出すこともできていた。このような振り返りは次時の導入で扱うこととし、子どもの問いから授業をつくることができた。

(2) 1年「かたちづくり」 色板4枚を並べて、影絵と同じ形をつくる

形の構成と分解について、新学習指導要領解説には、「色板での形作りでは「しかく」は「さんかく」二枚で構成できること、「ましかく」が二つで「ながしかく」が構成できることなどに児童が気付けるよう配慮する。また、形を構成したり分解したりする活動では、ずらす、まわす、裏返すなどと図形を移動したり、ぴったり同じ形や大きさは違うが似ている形を作ったりすることなどの活動を豊富にさせることが大切である。」とある。



本事例は、教科書教材の影絵遊びの活動では、試行錯誤する中で構成要素に気がつくこともあるが、一方で何気なく色板を並べるだけでも形が作れることから「形の中に形を見つける」ことを通して、図形の構成要素に着目し、図形を構成する思考方法を身に付けさせようとした実践であり、単元構成にも工夫が見られる。

4. 今後に向けて

本研究の振り返りの視点で授業を分析することが授業改善には有効であり、今後も引き続き研究を進める必要がある。

(金澤 秀太朗・畑 稔彦)

1－1 1) 中学校に設置された通級指導教室における指導・支援のあり方について

1. 事業名および担当者

事業名は、「中学校に設置された通級指導教室における指導・支援のあり方について」である。担当者は、教育学部：窪田知子、滋賀県 X 市 Y 中学校校長および Z 教諭（通級指導教室担当教員）である。なお、通級指導教室に通っている子どもの個人情報保護の観点から、本誌では連携先学校名、担当者氏名を伏せて報告することをご了承願います。

2. 事業の目的

通級による指導とは、通常の学級に在籍し、ほとんどの授業を通常の学級で受けながら、障害の状態に応じた特別な指導を週 1～8 単位時間、特別な指導の場で行うものを指す。言語障害や弱視、難聴、肢体不自由、病弱・虚弱のほか、自閉症や学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）の子どもが対象となる。

2018 年度より高等学校においても通級による指導が開始されるなど、通常学級で学ぶ子どもたちの特別な教育的ニーズの受け皿の 1 つとして期待されている通級による指導であるが、中学校の通級指導教室は全国的にみても小学校に比べて設置教室数が少なく、まだ具体的な指導・支援のあり方について模索段階であるといえる。滋賀県でも同様の傾向がみられる。そこで、本研究では中学校における通級指導教室の役割と具体的な指導・支援のあり方について検討することを目的としている。

3. 事業の概要

（1）共同研究のスタイル

通級指導担当教員である X 市立 Y 中学校の Z 教諭と、中学生で通級による指導を必要としている生徒のつまずきや困り感の見立て、必要な支援の方向性などについて検討を行った。

（2）研究の進め方

<研究を進めるにあたって…>

筆者は X 市の発達障害支援コーディネーターを務めており、本研究を進めるにあたり、平成 31 年 3 月 25 日（月）14:45～16:45、X 市立 Y 中学校において、Y 中学校教員や X 市教育委員会指導主事らと「中学校通級指導教室開設にあたって必要なこと」について協議を行っている。

①第 1 回検討会

令和元年 9 月 27 日（金）13:00～18:00、X 市立 Y 中学校通級指導教室を訪問し、教室の環境設定等（ex. 生徒が廊下から見られることを気にせずに安心して学習に臨めるように窓に薄いカーテンをつける、パーテーションで仕切って机上の学習を行うスペースと心身をほぐしたり身体を使った活動を行うスペースに分けて空間を構造化する、保護者や担任とゆったり話ができるスペースを設ける）について検討した。また同日、Y 中学校 2 年生を中心に授業観察を行い、Z 教諭とともに、通級による指導を利用している各生徒の状況や課題および今後の支援の方向性について協議した。

②第1回検討会以降（12月）

2学期の中学校通級指導教室の取り組みについて、メールで検討を行った。

③第2回検討会

令和2年3月に、X市立Y中学校通級指導教室において、第2回目の検討会を行う予定である。

（3）結果

X市において新たに開設された教室であり、かつ中学校で初めての通級指導教室であったことから、その運営にはあたっては、管理職をはじめ、各クラスの担任や教科担当教員の理解が欠かせなかった。その点について、Y中学校ではZ教諭が職員会議で情報提供を行ったり、積極的に通級指導教室での生徒の様子を伝えに行ったりして、丁寧に指導の経過や結果を他の教員にフィードバックしていた。また、指導の様子を記した連絡文書を回覧することで、円滑な連携協力をめざしていた。通級による指導を受ける生徒は通常学級に在籍しており、そのほとんどの時間を自分の在籍学級で過ごすことから、「通級指導教室に行けば、その生徒の困り感が解消される」という認識ではなく、通級指導教室と通常学級が連携して支援を進めていくことが重要である。とりわけ中学校の場合は、各教科で担当が変わり一人の生徒に複数の教員がかかわっているため、有効な連携方法の確立が急務の課題といえる。

今回の研究では、中学生の通級ならではの難しさも浮かび上がってきた。たとえば、中学生の時点ではすでに学業不振や問題行動、不登校といった二次障害を呈していることも少なくないため、個々の生徒の中心課題が見えにくいことが挙げられる。また、「困っているけれど、自分が特別な教室に通っていることを周囲の人に知られたくない」というような生徒の声に表れているように、中学生という多感な時期に通級による指導を受ける生徒の心情に配慮した支援の進め方も求められる。

4. 今後に向けて

本研究を通して、中学生ならではの通級による指導の難しさが見えてきた一方で、「ここでは起きていられる」「よく理解できる」といった生徒の声からは、通級による指導が学校内で生活や学習上の困難を経験している生徒にとって一定の効果をもたらすことも確認できた。通級による指導が、生徒にとって真に「がんばりたい」気持ちを手助けする場所となるために、さらなる研究が必要である。また本年度は、対象生徒たちの認知機能の未熟さに注目し「コグトレ」などを積極的に取り入れた指導を行ったが（宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』新潮社、2019などを参照）、今後は、中学生の通級として有意義な指導の中身や教材についてさらに検討を進めていくことが課題である。



図1 フォーラム当日の様子

本年度、滋賀大学大学院教育研究フォーラム（特別支援教育フォーラム）「どうつながる？通常の学級と通級指導教室 PartⅡ」を開催したところ（2019年12月21日）、通級による指導については学校現場の関心が非常に高いことがうかがえた。今後、より一層研究を進め、その成果を教育現場に還元していきたい。

（窪田 知子）

1 共同研究事業

1－12) 理科指導力向上研修の企画研究 ～小学校理科 観察・実験指導のコツを学ぶ～

1. 事業名および担当者

事業名は「理科指導力向上研修の企画研究 ～小学校理科 観察・実験指導のコツを学ぶ～」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部：糸乗 前，徳田陽明

滋賀県教育委員会：一伊達統（幼小中教育課主査），草津市教育委員会：尾関大応（H24 年度認定）

東近江市立蒲生西小学校：西田栄宏（小学校長 H24 年度認定，滋賀 CST 研究会会長）

CST（コア・サイエンス・ティーチャー）：森田博（長浜市立南郷里小学校教諭 H30 年度認定），大橋良平（虎姫小学校教諭 H22 年度認定），間所忠昌（虎姫中学校教諭 H23 年度認定），山田陽子（長浜北小学校教諭 H29 年度認定），荒川拓也（大津市立瀬田中学校教諭 H23 年度認定），田中憲治（長等小学校教諭 H24 年度認定），蓮蔵優治（東近江市立箕作小学校教諭 H23 年度認定），長瀬良文（船岡中学校教諭 H23 年度認定），蜂屋正雄（草津市立矢倉学校教諭 H23 年度認定），桑原康一（栗東市立治田東小学校教諭 H24 年度認定），渡辺幸寛（甲賀市立土山中学校教諭 H24 年度認定），堀道雄（守山市立河西小学校教諭 H25 年度認定），中村友也（近江八幡市立安土中学校教諭 H27 年度准 CST 認定）

2. 事業の目的

本事業の目的は，小中学校理科の教科書に基づいた観察，実験を安全に楽しく指導するために，教師が様々な体験をすることで，児童の実感を伴った理解に繋げることにより重点を置いた研修を企画することであり，共同研究として継続して実施してきている。主に滋賀大学が認定している CST（コア・サイエンス・ティーチャー）教員が企画する研究授業や教員研修会に大学教員が共同研究として参画することとしている。認定 CST が組織する滋賀 CST 研究会と連携することで，同時に行っている共同研究のように，地域を主体とした研修会（大津地域主催）と CST 教員相互の研究協議会（長浜地域主催）等として実施する。CST 研究会の特徴の一つとして，小学校と中学校の校種を超えた研修を実施できることで，小学校教員にとってはより専門的な視点からの助言を得ることができるのに対して，中学校教員にとっては小学校段階での既習状況の把握による授業構成を考えられることが利点である。また，個々の研修研究会は担当する CST 教員にとって CST 活動の効果的な実施や指導者としての一層の資質向上を目指している。

3. 事業の概要

「理数系教員（コア・サイエンス・ティーチャー：CST）養成拠点構築事業」は，小・中学校教員の理数教育における指導力向上を図ることを目的として，地域の理数教育において中核的な役割を担う教員の養成を目指すことで開始された。本学では平成 21 年度に「大学と教委の強固な連携による早期 CST 活動を組み込んだ包括的な養成プログラム」として（独）科学技術振興機構（JST）に委託され，平成 25 年度からは滋賀大学が滋賀県教育委員会との連携協力を得て養成プログラムとして継続してきた。教員プログラムでは，CST の養成候補となる教員は学校長推薦から市教育委員会と県教育委員会を通じた推薦であり，優れた授業実践力や観察・実験能力をもつ教員を確保し CST 養成を行っている。地域で中核と

なって活動できる認定 CST 教員は、令和元年度までに 61 名を認定した。また、認定 CST 教員および准 CST 教員で組織された滋賀 CST 研究会が組織され、研修会が実施されている。県内を 6 つのブロックに分け、滋賀県および各市の教育委員会での小・中学校理科部会の充実した活動に加えて、滋賀 CST 研究会のネットワークが教員各自の連携協力や情報交換、特に授業に関する相談のできる繋がりが作り出されることが期待されている。

令和元年度研修会 日時：令和 2 年 1 月 24 日（金） 場所：長浜市立南郷里小学校

5・6 校時 研究授業：小学校 4 年理科「もののあたため方」

授業者：長浜市立南郷里小学校 森田 博 教諭

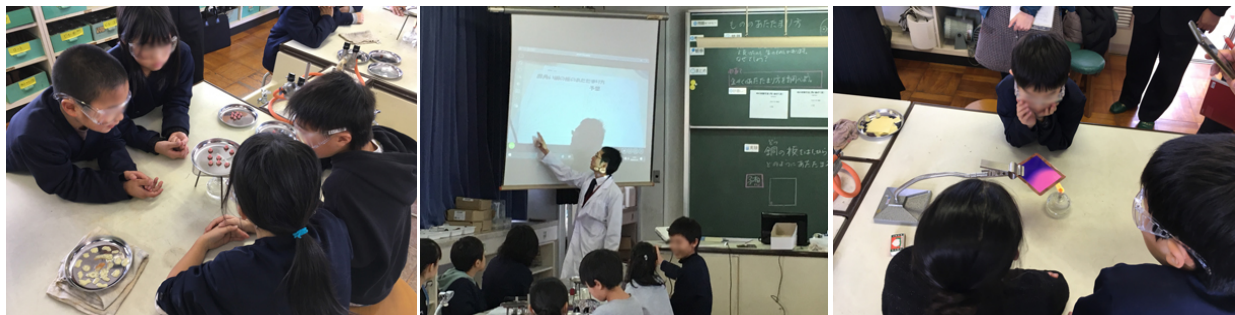
研究協議会：滋賀 CST 研究会 認定 CST 教員 13 名、准 CST 教員 1 名、校内教員約 10 名

指導助言：滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課 一伊達 統 主査

単元目標：金属、水および空気の温まり方に興味を持ち、自分の仮説を持って追及する活動を通して、金属と水や空気では、温まり方が違うことを物の性質と関連づけて捉えることができるようにする。

本時の目標：金属を熱して金属の温まり方を調べ、その過程や結果から自分の考えをまとめることができる。金属は、熱した部分から順に温まることを実験を通して理解する。

4 つの卵をフライパンに並べて焼くことを身近な例として取り上げ、金属の温まり方を調べることに繋がった。日常生活との関連が深く、子供達の興味関心を引きつけることができた。また、チーズやチョコレートなど実験に使ってみたい身のまわりの物を準備し、とける様子から物の温まり方を考えた。ただ、興味が分散する傾向が見られたので、1 つに絞って実験することも提案された。さらに、示温テープを貼った銅板を熱する実験も行い、金属は熱した部分から順に温まることを確かめた。



4. 今後に向けて

この授業は発展的な学習として、温められた空気の性質を使った熱気球を実際に膨らませるために、運動場での熱気球の係留飛行を市内の熱気球ボランティアに実施していただいている。その様子が長浜市ほっとにゅーすに掲載されている。今後は今回の研修会を参考にして、県内の CST 教員が協力しながら実施することの有用性をさらに検討していきたい。CST 教員は勤務校のみならず、地域の学校での理科教育の中核となり児童生徒の理科教育に関わる能力向上を目指した活動が期待されている。滋賀大学としてもこれらの活動への支援として県教委並びに市教委と連携しながらさらなる CST 教員の養成を継続したいと考えている。加えて、今後のトピックスとして内閣府が推進する知財創造教育についても滋賀 CST 研究会を中心に先進的に取り組む予定である。

（糸乗 前）

1 共同研究事業

1－13) 理科指導力向上研修の企画研究 ～苦手分野から応用まで～

1. 事業名および担当者

事業名は「理科指導力向上研修の企画研究 ～苦手分野から応用まで～」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部：徳田陽明，糸乗前，大山真満

大津市市立仰木中学校：古川恵子（中学校長）

CST（コア・サイエンス・ティーチャー）：荒川拓也（大津市立瀬田中学校教諭 H23 年度認定），田中憲治（長等小学校教諭 H24 年度認定），池内伸圭（仰木中学校教諭 H30 年度認定 H23 年度准 CST 認定）

2. 事業の目的

小中学校理科の教科書に基づいた観察，実験を安全に楽しく指導するために，教師が様々な体験をすることで，児童の実感を伴った理解に繋げることに重点を置いた研修を企画することである。理科の教科書に記載された実験，観察を中心に，その指導上のコツを学べることを大切にしたい。また研修の企画段階においては，滋賀大学が認定している CST（コア・サイエンス・ティーチャー）教員と大学教員が共同研究として参画することとした。継続して実施することで滋賀県の理科教育に貢献することが目的である。

3. 事業の概要

大津市内の小中学校，中学校合わせて 20 数名の教員の参加があった。最初に長等小学校の田中憲治教諭から市販の携帯顕微鏡を用いたツユクサの葉の気孔の観察の方法が紹介された。ツユクサは気孔が非常に見えやすく，中学校の教科書でも紹介されているが，初めて観察した教員も多く，簡単に観察でき，きれいに気孔が見えることに参加者は驚いていた。また，それ以外にも火山灰なども携帯顕微鏡を用いると準備も簡単であることや，ICT により映像などはいろいろあるが，実物を準備できるものについては，実際に見ることの大切さを学んだ。しかし，学校によっては携帯顕微鏡を全員分準備することは難しいため，それに変わる方法として，簡易携帯顕微鏡の作成が紹介された。小型のペットボトルの先を切り取り，ふたに穴を開け，穴の部分にレンズを取り付けるだけの簡単なもので，倍率的には市販の携帯顕微鏡と同じぐらいのものを作ることができた。また，購入物についても小型レンズのみで非常に安価で作成できることも魅力である。



研修の後半は，外部講師である滋賀大学の大山真満准教授から，天体の問題を生徒が考えるときにどのような間違いをするか，間違いがないようにするために教える側としてどのような視点をもって教えていくことが必要かを学んだ。その後，仰木中学校の池内伸圭教諭から天体望遠鏡の使い方について実際に天体望遠鏡を組み立て・設置し，太陽の黒点の観察を行った。3 人に一台の天体望遠鏡を準備したため，全員が組み立てから観察の方法，片付けまでを体験することができた。

研修の効果

気孔の観察などはルーペさえあれば手軽にできるものであるが、理科を苦手に行っている教員にとっては経験がないため、授業で取り組まれていないのが現状である。今回の研修が教員の経験となり、取り組むきっかけとなることを期待する。また、今回のようにペットボトル顕微鏡を用いることで、安価で作成ができ、全員が見ることができるため生徒の意欲が高められると考える。



天体望遠鏡は小学校にはほとんど設置されず、中学校でも教科書にあるにも関わらず、無い学校もあるのが現状である。それは、教員も使用したことがなかったりすることで、積極的な購入を望んでいないことが一因であると考えられる。しかし、天体の分野を実体験するためには天体望遠鏡は必要不可欠なものであり、このような研修を進めることで、天体望遠鏡を用いた授業の実践が行われ、全ての学校に天体望遠鏡が設置されることを期待する。

受講者の感想

○天体望遠鏡を今まで見たことも使うことも一度もなかったので使い方や注意点など丁寧に教えて頂きとてもよい活動になりました。また、学校には顕微鏡が約7台、班に1台しかないため、手作り顕微鏡を活用していきたいと思います。

○ペットボトルで簡単に作ることができ、子供たちも意欲的に取り組めると思いました。月の満ち欠けについても意識させるポイントを明確にするおとの大切さを学びました。望遠鏡についても、子供たちに体験をさせることが深い学びにつながると思いました。

○手作り顕微鏡がすごくよく見えてびっくりしました。一人一つ持ったら、授業でできることがもっと広がるので、2学期子供たちに作らせたいと思いました。



4. 今後に向けて

小学校の教員向けの理科の研修を5年以上続けているが、たいへんニーズも高く好評である。普段から工夫している点を他の教員に伝えることができることは大変有意義なものであることが受講生の感想からも分かる。実験の工夫やアドバイスも今後とも続けていくべきであるが、「主体的・対話的で深い学び」の視点から学習過程の改善も視野に入れて、児童・生徒がどのようにすることで思考を深められるまでの研修を行っていくことが必要である。

今年度は大津市のCST教員と連携することで教員研修会を企画した。CST教員は勤務校のみならず、地域の学校での理科教育の中核となり児童生徒の理科教育に関わる能力向上を目指した活動が期待されている。滋賀大学としてもこれらの活動への支援として県教委並びに市教委と連携しながらさらなるCST教員の養成を継続したいと考えている。

(荒川拓也・徳田陽明)

1－14) 生徒が主体的に学び、確かな学力を身につけるための学習指導

1. 事業名および担当者

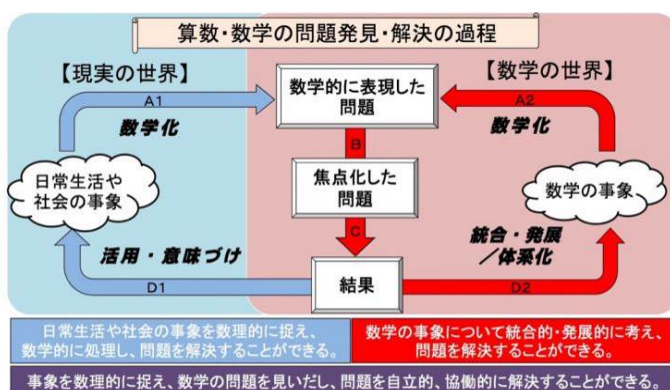
事業名は、「生徒が主体的に学び、確かな学力を身につけるための学習指導 ～わかる・できる授業を目指して～」であり、担当者は次の通りである。

豊郷町立豊日中学校：中野泰弘（教頭），北村 俊（研究代表，数学科教諭），岩崎 剛（数学科教諭）
高井克徳（数学科教諭），高尾和樹（数学科講師）

教職大学院：畑 稔彦

2. 事業の目的

新学習指導要領では、数学的に考える資質・能力を育成する上で、数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動を通して学習を展開することを重視している。算数・数学の問題発見・解決の過程は、答申で示された右のようなイメージ図で考えることができる。本事業では、イメージ図の左側の【現実の世界】の部分を含む過程、日常生活や社会の事象を数理的に捉え、数学的に表現・処理し、問題を解決し、解決過程を振り返り得られた結果の意味を考察する過程プロセスを意識した教材の開発を進める。



中学校学習指導要領解説 p. 23 平成29年7月文部科学省

3. 事業の概要

数学科では、数学科担当教員全員が研究授業を行い、様々な考えを引き出したり思考を深めたりするような発問や指導の在り方を検証した。豊日中学校で設定している3つの視点

視点1 教材は適切か。ねらいに対してどうだったか。

視点2 生徒は思考していたか。どのような考え方を身に付けることができたか。

視点3 伝えたいような問題設定ができていたか。

をもとにした研究協議を行った。あわせて、事前の指導案検討および先行授業についても大学担当者は指導助言にあたった。

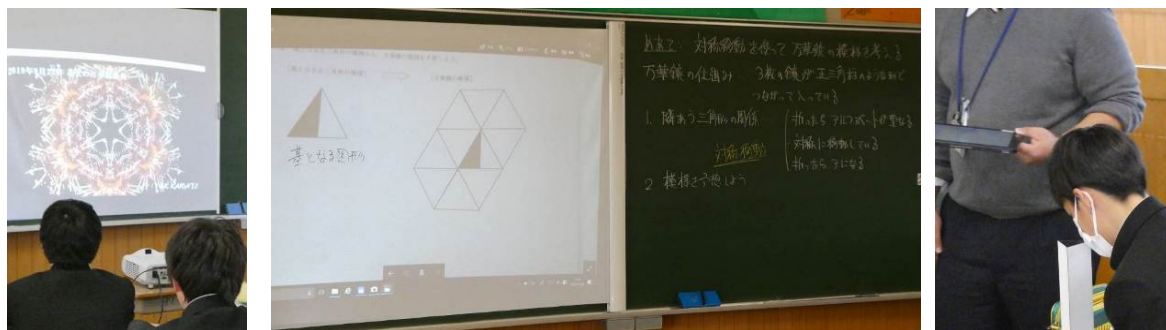
1月21日(火) 指導案検討 28日(火) 研究授業 1年「平面図形」，3年「三平方の定理」

本稿では、実践された研究授業の2事例を示したい。

(1) 1年「平面図形」万華鏡 少人数授業

実生活の場面では、事象を図形に着目して観察し、その特徴を的確に捉えて考察することが大切である。しかし、全国学力・学習状況調査の結果からも、事象の特徴を的確に捉え、数学的な表現を用いて説明することに課題がみられた。そこで、本事例では、平成29年度全国学力・学習状況調査 授業アイディア例を参考に、図形の移動に着目して2つの図形の関係を捉え、数学的な表現を用いて説明するこ

とや、身の回りにある模様の中から様々な図形の移動を捉えることができるようにすることをねらいとした。



本事例では、教具を用いて万華鏡に映すことで、実際の模様を確認する事ができ、図形の移動について粘り強く考える生徒の姿が見られた。その一方で「日常生活や社会の事象の数学化」という点では、万華鏡の模様を観察するときに、覗いた時の模様は端にいくほど歪んで見えるため理想化することや、同じ形で敷き詰められていることから、もととなる図形に着目して考察をすすめているという点のおさえが弱かった。数学的な見方・考え方を働かせて、事象を数学の舞台にのせている点に留意することが大切であることを確認した。

(2) 3年「三平方の定理」正六角形の面積 少人数授業

ミツバチが巣をつくる動画から、巣はなぜ正六角形なのだろうかという問題を設定した。「ミツバチは正三角形や正方形ではなく、なぜ正六角形が最もよいとして選んだのか、図形の特徴の違いから調べられないだろうか。」と発問し、仮説を立て、検証するという流れを重視した。



本事例では、正六角形の面積を求める必然性を生徒が感じるような文脈の工夫が見られる。正三角柱、正四角柱、正六角柱のどれが一番多く蜜が多く入るかを考える場面で、同じ大きさの画用紙でつくった柱体の側面を見せ、「高さが同じであれば高さを無視でき、底面積の大きさに判断できる。」「同じ大きさの画用紙を使ったのだから、周の長さはどの図形も等しいので、底面積が大きくなる正多角形を見つければよい。」というような生徒の考えを引き出しながら問題を焦点化したことで、意欲的に問題解決に取り組む姿が見られた。

4. 今後に向けて

問題解決の必然性を感じる課題を設定することで、生徒が主体的に学ぶ姿が見られた。算数・数学の問題発見・解決の過程において、数学の舞台にのせる場面においては、引き続き研究を続け事例を提供できるようにしたい。

(北村 俊・畑 稔彦)

1-15) チームで考える授業づくりⅡ 「若手・中堅教員を育てる教材開発プロジェクト」

1. 事業名および担当者

事業名は、チームで考える授業づくりⅡ「若手・中堅教員を育てる教材開発プロジェクト」であり、担当者は次のとおりである。

学部教員：新関伸也

滋賀県中学校美術教育連盟：梶岡 創(委員長)，堤 祥晃(副委員長)，北崎丈士(研究部長)

2. 事業の目的

○以下の目的で、授業力向上のためのグループ別研究会を行う。

- ・公開授業者だけでなく、多くの教員に学びが共有できるシステムをつくる。
- ・複数で授業づくりをすることで、多角的、客観的な教材研究につなげる。
- ・実践した成果を若手教員や学生と共有し、教員として必要な資質能力を育成する。

3. 事業の概要

(1) 研究の背景

中学校現場では、少子化や授業時数削減により、美術科教員は1校に1名という学校がほとんどである。また、初任者研修等、研修の機会は数多くあるものの、教科や授業づくりに関する研修の時数は限られており十分とはいえない。その結果、経験の浅い教員が教科について相談できる身近な教員もいない状況で、過去に経験した題材や前任者の題材を吟味することなく踏襲している事例を多く見かける。生徒の実態や時代の要請に適していない題材は、ねらいや養うべき資質能力が明確でなく、授業の質の低下を招いている実態がある。

滋賀中美連では、3年前から若手・中堅教員の実践力を高めることを目的にグループ研究プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトは、年間3回行っている授業研究会を利用したもので、若手・中堅美術科教員で少人数グループを編成して、研究授業に向けて題材開発をすすめ、そのプロセスによって多角的、客観的な視点から実践力の強化を図っている。試行錯誤による授業研究会ではあったが、若手教員にとって題材開発に取り組む貴重な機会となり、有効な研修の機会となった。

しかし、実際の研究授業となると研究会で目標としたねらい（養いたい資質、能力）を十分達成しているとはいいがたい実践となり、必ずしも実践力向上に繋がっていない場合もみられた。その要因として、授業展開は吟味されているが発問の内容や時間配分、板書や提示資料など具体的な進め方を授業者に任せきってしまったことがある。さらに、生徒の実態把握や教師の指導技術のレベルに、それらが十分対応できていなかったことが原因として挙げられる。

そのような理由により、本年度は授業展開や時間配分、具体的発問、教材の提示方法など授業の細部にまで言及し、教師の指導技術の向上にも力点を置いて研究を推進することとなった。

(2) 研究の概要

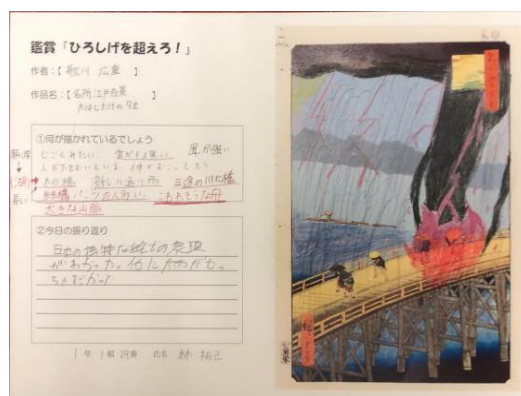
滋賀中美連では、年間3回の授業研究会を行っている。本年度の研究では3回の研究会のうち2回をグループ研究に、1回をグループ研究に向けてベテラン教員の授業を参観する機会とした。グループ研究では、若手・中堅の教員で2つのグループ(各8名程度)を編成し、研究授業に向けてそれぞれ教材研究を進めるというスタイルで授業づくり研究会を組織した。グループ編成に際しては、昨年度までの取り組みの反省から、中堅教員に運営を委ねる部分を増やすために、アドバイザー的な役割をする教員の人数や参加回数を減らすこととなった。

また、本研究は授業づくりを通して教員同士の学びを共有したり、多角的、客観的な視点から考えたりできるシステムの構築を目指している。そこで、本年度は研究グループの教員間で先行授業や関連した授業を行い、授業中の生徒の取り組み状況や生徒の作品、ワークシートなどを検証しながら授業づくりを進めた。

(3) 成果と課題

本研究会は、参加教員が研修の意義や楽しさを感じつつ主体的に教材研究を行うことを目指しているため、グループで最初に集まる研究会を懇親会と合わせて行うなどの工夫をしている。年数を重ねていることもあるが、会の目的の一つである、多くの教員に学びが共有できるネットワークが構築されつつあり、これまでのノウハウを活かしながら、若手・中堅教員が主体的に研究を進めていくスタイルが定着していると感じた。また、1回目の授業研究会でベテラン教員の授業を参観したことが若手の教員にとって良い刺激になり、その後の授業づくりに大いに参考になった様子であった。

本年度の新しい試みである研究グループの教員による先行授業では、生徒の授業中の反応や取り組み状況から授業案を練り直すことになり、その過程で参加教員に多くの学びが生まれていた。その結果、研究大会での研究授業が昨年度までに比べると格段にレベルアップした内容になり、大会の参加者からの評価も高いものとなった。今後の課題としては、グループ授業研で開発された題材を広く一般化するなど、研究成果を共有するための取り組みを進める必要がある。



先行授業のワークシートより

4. 今後に向けて

とかく公開研究会等の事後研究会等は、授業者だけの省察になりがちで、そこから導かれる教科の共通の改善策や授業構造の課題が共有されにくい現状がある。その試みの一つとして、事前に複数の教員で授業開発を行い、また省察する取組を若手・中堅教員育成の観点から実施してきた。今後それらの成果をより多くの美術教員に周知するための具体的な策が必要である。

次年度は、これまでの研究を継続すると共に研究成果を周知する手立てを講じながら、教員として必要とされる資質能力にアプローチしていきたい。

(新関伸也)

1－16) 鑑賞学習ループリックを活用した授業実践に関する研究Ⅱ

1. 事業名および担当者

事業名は、「鑑賞学習ループリックを活用した授業実践に関する研究Ⅱ」であり、担当者は次のとおりである。

学部教員：新関伸也

高島市立安曇川中学校：下澤 辰次(校長)，堤 祥晃(教諭)

2. 事業の目的

美術鑑賞学習ループリックを活用した鑑賞の授業について，中学校の美術科で実践してもらい，その効果や課題を分析して授業の内容や方法を検証する。また，実践の成果や教育的意義を学生と共有し，教員として必要な資質能力の育成に寄与する。

3. 事業の概要

(1) 研究の目的

近年，美術教育における鑑賞教育の重要性が高まっており，学校現場では様々な授業実践が試みられている。しかし，個々の教員が独自に工夫した題材を実践しているという傾向が強く，広く一般的な鑑賞教育のスタイルが確立しているとはいえない。『美術鑑賞学習のループリック評価と授業モデルの普及に関する実践的研究 研究代表：新関伸也』はそのような現状を補完することを目的とした研究であり，本研究は昨年度実施した『鑑賞学習ループリックを活用した授業実践に関する研究』の成果や課題をもとに，さらに実践研究を深め，その授業実践を広く共有して授業モデルとして一般化することを目指している。

昨年度の研究の成果として，ループリックを活用することで，示された評価規準から具体的な評価基準を考えて授業が行えるようになった。また，評価基準が具体的であるため，生徒が目標に到達できたかという授業後の評価が客観的に行えるようになった。

しかし，設定された目標に対して，どの様な授業展開や題材の提示方法，教師の発問が効果的であるかについては十分検証ができておらず，これまでの鑑賞の授業スタイルをベースにして授業を組み立てていることが多い。

今回の研究では，他校の美術教師と連携し，同じ題材(作品)を使用しながら目標やスタイルの違った授業を行い，目標とするループリックの項目によってどの様な授業展開や発問が効果的であるのかを，授業実践を通して分析し，検証することを目的としている。

(2) 実践事例

○日時：令和元年12月13日(金)2,3,4校時

○学年・組：第2学年1組，3組，3組

○題材名：『北斎の秘密を探れ!』

○参観者：新関伸也，松岡宏明(大阪総合保育大学教授)，北崎丈士(大津市立瀬田北中学校教諭)

○授業の概要

鑑賞の授業で扱う《神奈川沖浪裏》は、葛飾北斎の《富嶽三十六景》中の1作品で、「凱風快晴」「山下白雨」と合わせて三大役物と呼ばれる同シリーズ中の傑作である。その特徴として、高く激しく渦巻く波濤に揉まれる三双の舟、うねる波間から遙か彼方にある富士山が垣間見えるという大胆な構図があげられる。また、一説によると黄金比や対数螺旋を利用して画面を構成しているとも言われている。今回の授業では特にこの作品の造形的な特徴に着目し、作者の表現意図と色、形、構図の関係性を探ることを目指して、次の様な鑑賞学習ループリックの観点で授業を行った。

○題材の目標

- ・作品の主題や造形について、作品にまつわる知識や他者の見方・感じ方に刺激を受けながら、自分なりの見方・感じ方を持つことができる。
〈コモンループリック観点 (A) 「見方・感じ方」レベル3〉
- ・独特な形をした波濤、富士山の安定感、青と白が織りなす調和などについて、説明できる。
〈コモンループリック観点 (C) -1 「形、色」レベル3〉
- ・波と富士山の遠近感、大小の対比、繰り返される三角形の構図、対角線上にある波頭の先や山頂の位置などについて、説明できる。
〈コモンループリック観点 (C) -2 「構成、配置」レベル3〉

○成果と課題

あらかじめ指定されたループリックの観点で授業を行ったため、「生徒に養いたい力」の視点から題材（作品）を見直す良い機会となった。特に鑑賞の観点を形や色などの造形要素に絞ったことで、作品の何に注目させたいかが明確になった。また、観点が明確になったことで、授業を構造化して考える手助けとなった。一方、生徒においても、発問に対する応答やワークシートの記入を見る限り、ループリックの観点到即した発言や記述があり、ある程度当初の学習のねらいを達成することができたと考える。反面、かなり教師の誘導的な授業展開となったため、作品の主題を想像したり、描かれているものから想像を膨らませて絵の世界を楽しんだりする活動が少なく、分析的に作品を鑑賞する活動に偏ってしまった感がある。今後の実践では、コモンループリック観点 (A) 「見方・感じ方」とのバランスを考え、授業展開を工夫する必要がある。



葛飾北斎《神奈川沖浪裏》

4. 今後に向けて

美術鑑賞学習ループリックを活用した鑑賞の授業の実証授業では観点がはっきりとしているため、授業のねらいや育てたい資質能力が明確になり、授業展開を構造化することが出来た。また、ねらいの到達度など、実践後の分析にもループリックの観点があることによって、生徒の見方や考え方を評価することができて効果的であることが立証された。しかし、観点が明確である分、指導者の発問によってやや誘導的になる場面があり、生徒の自由な見方や考え方で作品を鑑賞する自由さが失われてしまうところがあった。これらの成果と課題を踏まえ、次回も継続してより具体的な指導の手立てを講じ、実践を積上げながら様々な角度から検証して課題を解決したい。

(新関 伸也)

1－17) 特別支援学校における音楽づくりの授業開発プロジェクト（2）

1. 事業名および担当者

事業名：特別支援学校における音楽づくりの授業開発プロジェクト（2）

担当者：林 睦（教育学部）、岡ひろみ（滋賀県立新旭養護学校）

研究協力者：可児麗子（打楽器奏者）、中村典子（京都市立芸術大学准教授）

教育学部音楽専攻4回生（11名）、大学院教育学研究科（障害児教育：現職教員）1名

楽器提供：麻植美弥子（箏奏者、美音の会）

2. 事業の目的

特別支援学校の音楽の授業において、ゲストティーチャーを招いた音楽づくりの授業実践を行い、ゲストと参観者と授業者が共に検討を重ねることで、生徒が主体的に参加できる音楽づくりの授業開発を目的とする。

3. 事業の概要

ここ9年来、岡（新旭養護学校）は特別支援学校での音楽づくりの研究と実践に取り組んでいる。本プロジェクトでは、ゲストティーチャーから新たな視点や刺激を得ながら、新旭養護学校中学部での音楽づくりの実験的な授業を3回実施し、授業について討議を行い、特別支援学校における音楽づくりの授業開発を行った。

第1回目の授業は、11月5日に実施された。打楽器奏者であり、音楽づくりの授業経験が豊富な可児麗子がゲストとなり、スリットドラムを使った音楽づくりの授業を岡・可児と協働して実施した。授業では、スリットドラムの上面を打ったりこすったり、ひとつの音板のみの演奏から、複数の音板を響かせる演奏、あるいは側面を打ったりばちの種類を変えるなど、様々な奏法の工夫を生み出すことができた。さらに可児と一緒に授業を行ったことで、音の作り方やまとめ方、曲の雰囲気や作り方や新しい奏法などから示唆を得て、さらに音表現の幅を広げることができた。

第2回目の授業は、12月5日に実施された。滋賀大学教育学部音楽教育講座の4回生11名がゲストティーチャーとなって授業を行った。授業前半では全体での楽器紹介の後、4グループに分かれて学生と一緒に楽器体験を行った。授業後半は中学部の生徒がスリットドラムを使った自分たちでつくった作品を披露した後、再び4グループに分かれてスリットドラムで生徒がつくった音楽に学生が管楽器でコラボレーションを行った。そして最後に4つのグループが順番に、生徒と学生が一緒につくった音楽を披露した。本授業を実施するにあたっては、林、岡、学生らが何度も打ち合わせを行って当日を迎えた。学生たちは、生徒がつくったスリットドラムの楽譜を生かして、自分たちが作った管楽器アンサンブルを披露したり、生徒のスリットドラムの作品に管楽器の即興演奏



で加わったりするなど、音楽によるコラボレーションを試みた。生徒にとっては、びわ湖ホール「ホールの子事業」のコンサートで見たことがある楽器の形、CDでは聞いたことのある楽器の音色、授業で聞いたことのある楽器の名前ではあったが、実際に触れることができる距離で見聞きしたことは初めてあり、実際にリードやマウスピースを吹いたりピストンを押したりする経験は感動の出会いであった。その管楽器を演奏する学生たちと直接話をしたり、吹く動きを手伝ってもらったりしたことで、音楽や音に対する興味関心は広く深いものになった。また当日までに、スリットドラムを使ったグループ演奏を考えて、図形譜を作成していたグループの生徒にとっては、同じ図形譜を使った管楽器演奏を聴けたことは楽譜の意義を再確認する機会になった。さらに一緒に演奏できたことは、音楽の幅を広げることにつながっている。学生たちにとっては、特別支援学校の生徒とどのようにコミュニケーションをとり、臨機応変な対応をするか、特にノンバーバルで、音楽で生徒たちと交流する経験ができたことが、大変勉強になった様子であった。

第3回目の授業は、1月16日に実施された。作曲家で京都市立芸術大学准教授の中村典子氏を招いて、打楽器奏者である可児と協働して、鈴（りん）を使った音楽づくりを行った。中村は鈴を使って多様なジャンルの作品を書いてきて、世界の鈴について研究もしている。鈴は材質や大きさや厚さにより音高や音色が変化するだけでなく、西洋音階とはまた違った音程、豊かな倍音と響きをもつ面白さ、そして大きさの違う鈴を複数個並べて演奏したときの、鈴同士の響きが共鳴し合う魅力があり、林が特別支援学校の生徒の音楽づくりに適した楽器ではないかと考え、中村にアドバイスや楽器の調達を依頼して実現した授業である。言葉を獲得していない認識的に幼い段階の生徒にとっては、心地よい音の響きに浸ることができた。言葉を獲得し奏法の工夫を楽しむ生徒にとっては、大きい鈴の中に小さい鈴を入れて外側を打ったときに生じる共振音や、ひとつの鈴を打ったときに偶然隣の鈴に当たり2つの鈴の響きが共鳴し合ったときの驚き等があった。また音楽づくりの基本である音探しとして、楽器の持つ魅力から音そのものに意識を向けられたことは大きな成果である。



本プロジェクトの3回にわたる研究授業から、特別支援学校における音楽づくりの意義について、また教師とゲストティーチャーと生徒の三者が協働して音楽表現を追求するための授業のメリットについて、岡は生徒に聞き、林は学生と議論の時間を持った。その結果、生徒からは「緊張した。お姉さんと一緒の方がわかりやすかった。嬉しい」「（お姉さんと一緒の方が）小さいから大きくするところが良かった」という感想が聞かれ、学生からは以下のような学びを得たとの報告があった。

- ・インクルーシブというのは、参加者（教師・ゲストティーチャー・生徒・学生・観察者）がそれぞれの目的や課題を持っていてもよいのだということを見つけた。
- ・生徒たちも音楽が好き、私たちも音楽が好き、それでいいんだということがわかった。
- ・言葉でうまく通じなくても、音楽でコミュニケーションすれば通じるという体験をすることができた。

4. 今後に向けて

特別支援学校における音楽づくりは、通常学校における音楽づくりに比べて、広まっているとは言い難い。でも、やってみるとすごくおもしろい。特別支援学校の生徒の持つ独創性、素直な表現に触れることができるからだと思う。音楽が大好き、表現したいんだという意志を全身で表す生徒たちを目の前になると、音楽することの原点に立ち返って感動する。音楽づくりは、そんな生徒たちの感性や表現がダイレクトに生きると考える。今後も授業開発を重ねながら、特別支援学校における音楽づくりの面白さを広めていきたい。

（林 睦・岡ひろみ）

1—18) 通級指導教室等の子どもに対する協調運動面の指導に関する実践的研究(3)

1. 事業名および担当者

事業名は通級指導教室等の子どもに対する協調運動面の指導に関する実践的研究(3)である。担当者は以下のとおりである。

教職大学院：川島 民子○ 奥田 援史

公立小学校通級指導教室：太田 恵 西田史子

2. 事業の目的

発達性協調運動障害とは、不器用で運動が苦手なことで生活や学業に支障が生じる場合を言う。近年、こうした特徴を有する児童は増加傾向にあり、小学校では通級指導教室等において活動することが多い。そこで、そうした子どもが、通級指導教室等でどのような学習活動をしているかを観察し、協調運動面を向上させる指導内容・方法について検討する。

3. 事業の概要

通級指導教室の担当教員は、通級指導教室に通う児童に発達性協調運動障害の特徴を有する児童が多いという実感がある。担当教員は、それらの児童に対して、より適切な学習活動に取り組みたいと考えているが、その具体的方法については模索状態にある。このようなニーズに対して、感覚統合の視点を取り入れながら指導を行うことの有用性について検討する。その際、本報告者がスーパーバイズとして関わりながら指導を進めることとした。

(1) 対象校 公立学校通級指導教室 2校

(2) 実施内容

	日にち	時間	対象校
【授業研究】	5月13日(月)	14:50～15:50	A小学校通級指導教室 1回目
	6月7日(金)	13:30～15:30	A小学校通級指導教室 2回目
	7月1日(月)	14:50～15:50	A小学校通級指導教室 3回目
	7月12日(金)	13:30～15:30	A小学校通級指導教室 4回目
【授業研究】	9月6日(金)	13:30～15:30	A小学校通級指導教室 5回目
	9月10日(火)	9:30～12:00	B小学校通級指導教室 1回目
	10月8日(火)	9:30～12:00	B小学校通級指導教室 2回目
	10月11日(金)	13:30～15:30	A小学校通級指導教室 6回目
	10月18日(金)	13:30～15:30	A小学校通級指導教室 7回目
	10月30日(水)	13:30～15:30	A小学校通級指導教室 8回目
	11月5日(火)	9:30～12:00	B小学校通級指導教室 3回目
	11月11日(月)	14:50～15:50	A小学校通級指導教室 9回目
	11月27日(水)	13:30～15:30	A小学校通級指導教室 10回目
	12月2日(月)	13:30～15:30	A小学校通級指導教室 11回目
	12月10日(火)	9:30～12:00	B小学校通級指導教室 4回目
【授業研究】	1月17日(金)	13:30～15:30	A小学校通級指導教室 12回目
	1月20日(月)	14:50～15:50	A小学校通級指導教室 13回目
	1月28日(火)	9:30～12:00	B小学校通級指導教室 5回目

* ケース児童の通級指導の参観(在籍学級での児童観察も含む)と通級指導についての指導助言

(3) 実際の内容（一事例）

①実態

○主訴（一部）

- ・ひらがなの習得に時間がかかった。
- ・自分の思いを伝える気持ちが強く、相手の指示が入りにくい。
- ・落ち着きがない。

○体の動きに関するエピソード（一部）

- ・大げさに動いてしまうことがある。風船バレーで風船を受けるのに回転レシーブになってしまう。
- ・常に何かを見つけて動き回っている。

②指導助言 第1回目

○アセスメント（一部）

- ・S-JPAN（JPAN 感覚処理・行為機能検査 Short Version）結果：姿勢運動や行為を含む全体的に苦手さがあり、特に指先の触覚を活用する課題、目と手を協調させる課題に落ち込みがみられた。
- ・JSI-R（Japanese Sensory Inventory Revised）結果：感覚情報処理に関して課題はみられなかった。
- ・風船バレーでは、相手からの風船を、受ける、高く上げる、アタックするという3段階での攻撃ができていた。一方で、回転レシーブをする等大げさにレシーブをする場面が何度か見られた。姿勢保持活動では、教師の示範通りのポーズは取れたが、保持することが難しく、すぐに崩れてしまった。

○課題

- ・適正な覚醒水準（落ち着き）で行動することができる
 - 姿勢を保持することができる
 - 深呼吸を習得することができる

③取組（一部）

・姿勢保持トレーニング

姿勢ポーズの種類を減らし、一つのポーズをゆっくり5秒保持できるようにした。また、5秒の瞬間に崩れてしまっていたので、「5秒終わってから」「終わったら三角座りに戻る」と、終わった後にも適正な覚醒水準を維持できるような配慮も取り入れた。

・深呼吸

「ゆっくり吸って、ゆっくり吐く」という行為を習得し、適正な覚醒水準を維持する場面で活かすことを目指した。

④取組結果

・姿勢保持トレーニング

3コマほど積み重ねていくと、集中して落ち着いて取り組むことができるようになった。

・深呼吸

ゆっくり吸ってからゆっくり吐くという切り替えの習得に時間がかかったため、背臥位姿勢で取り組んだり、視覚的に「吸う、止める、吐く」をカードで示したり、できるだけ長い時間ティッシュを揺らすという視覚的な支援を取り入れたりした。確実ではないがコツをつかめてきた。

4. 今後に向けて

これらの取組を継続することによって、通常の学級での学習との連携に取り組んで行く必要がある。

（川島 民子）

1-19) 学力向上プロジェクト

～わかった・できたを実感できる授業を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「学力向上プロジェクト」であり、担当者は次の通りである。

豊郷町教育委員会事務局学校教育課：八木佐登留（課長）

豊郷町立豊日中学校：北村 俊（教務主任）豊郷町立豊郷小学校：松尾甚吾（教務主任）

豊郷町立日栄小学校：安居猛司（教務主任）滋賀大学教職大学院：大野裕己，畑 稔彦

事業では、学校経営の立場からの専門的な研究支援を大野が担当し、研究の推進と取りまとめを八木（研究代表）が担当し、研究全般の総括支援を畑が担当した。また、各校における現状の分析と来年度に向けての立案を北村，松尾，安居が担当した。

2. 事業の目的

平成 29 年 3 月公示の新学習指導要領では、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立を改訂のポイントの 1 つとしている。

○ 教科等の目標や内容を見渡し、特に学習の基盤となる資質・能力（言語能力，情報活用能力，問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためには，教科等横断的な学習を充実する必要があること。

○ 「主体的・対話的で深い学び」の充実には単元など数コマ程度の授業のまとまりの中で，習得・活用・探究のバランスを工夫することが重要であること。

そのため，学校全体として，教育内容や時間の適切な配分，必要な人的・物的体制の確保，実施状況に基づく改善などを通して，教育課程に基づく教育活動の質を向上させ，学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントを確立することが求められている。豊郷町教育委員会では，管内の小中学校の教務主任を集め，新学習指導要領に向けたカリキュラム・マネジメントについて研修を実施しており，本事業は学術的側面から支援をすることを目的としている。

3. 事業の概要

豊郷町教育委員会では，管内小中学校の教務主任を集め，新学習指導要領に向けたカリキュラム・マネジメントについて研修を実施し，新任教務主任が経験値のある教務主任から学ぶ機会としている（経験年数 3 年目，2 年目，1 年目それぞれ 1 名）。具体的な内容は，カリキュラム・マネジメントの分析シート（以下，カリマネシート）をもとに，各校における現状の分析と来年度に向けての立案である。実践をすすめるうえで，「見える化」（育成する資質能力ー教育内容ー組織的条件）と「協働化」（教職員集団の内発的取組）を常に意識することとした。

○教務主任研修 2 月 18 日（火） 15:15～16:45

次年度に向けて修正したカリマネシートをもとに協議をおこなった。交流からの学びを 2 点，以下に紹介する。

・家庭学習の習慣化に向けた保護者との連携について小学校から報告された。学期ごとに 1 週間，児童

のメディアの使用状況を調べ、量的なデータを保護者に伝えた。家庭学習とメディアの使用状況の関係を示したことで、保護者からの反応も大きかった。大野からは、家庭での過ごし方を客観的に見直してもらう機会となり、学校からの発信ができていたこの機を捉えて次の一手を打っていくことについて助言があった。

- ・中学校からは多忙感を感じる教員が多いという現状を解消しようとした取り組みが報告された。

校内授業研究会を5回から3回に減 → 一人一回は指導案をかねて授業公開を計画的に実施
教科内で日々の交流が増え、授業改善の意識が高まった
部活動の朝練習を廃止、完全下校の時刻を最大で1時間繰り上げ → 時間外勤務の削減
時間割を弾力的に運用する → 前半に授業時数を確保し、年度末の時間割に余裕をもたせる
部活動の指導や事務処理の時間の確保

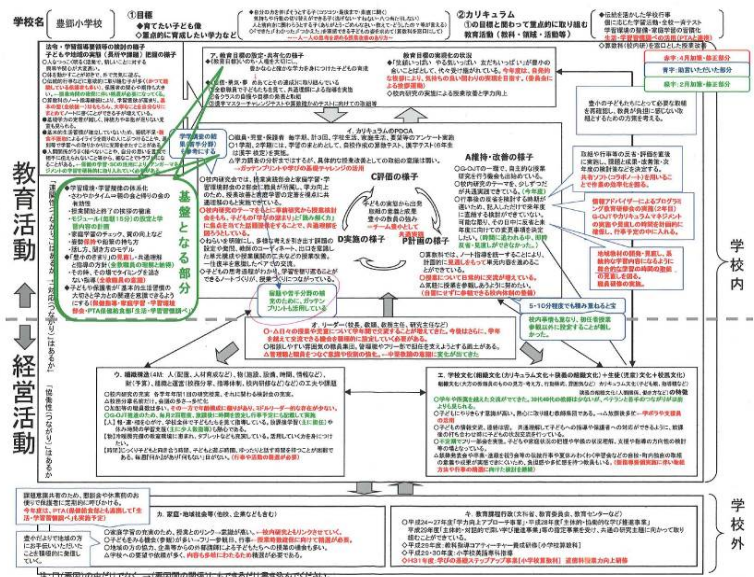
具体的な成果として上記の3点が挙げられたが、それでも時間が無いと感じている教員や学校評価アンケートの数値に関心の薄い教員がいることが課題としてでてきた。大野からは、やってよかったという達成感を教員が味わうことが重要であること。そのためには、全職員で子どもの姿を見て、課題をクリアする仮説を立てること、力をつける道筋がたつと、それを各教科や総合的な学習の時間にどう落とし込むかということになる(全職員がカリキュラム・マネジメントに関わることになる)こと、〇〇をやりたいためにこれをなくす(ホワイトリスト) ことについて助言があった。

研修会に参加した教諭それぞれが、各学校でのカリキュラム・マネジメントの確立の重要性と全教職員で取り組むことの必要性を再確認し、次年度に向けた具体的な展望をもつことができた。

4. 今後に向けて

カリマネシートを用いての研修会は3年目になるが、その間に各校の教務主任も入れ替わりがあった。しかしながら、右のカリマネシートが示すように、年度初めに加筆・修正した部分を赤字、研修会での助言を青字、年度末に加筆・修正した部分を緑字というように更新されていることから、作成することが目的ではなく、作成を通して教育活動の質の向上を図ろうとしていることが伝わってくる。互いに顔も分かり、各校の実情を踏まえながら話を進めることができる校区の教務主任会は、児童生徒の実態を全職員で理解し、共有するための情報を発信していく役割も担っている。カリマネシートや年間指導計画を交流することで、育成すべき資質・能力を9年間見通して明確化・具現化できる場であることから、引き続き開催していくことが望まれる。

(八木佐登留・畑 稔彦)



1－20) 石山っ子わくわく親子で畑体験隊

1. 事業名および担当者

事業名は、「石山っ子わくわく親子で畑体験隊」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部：森 太郎（代表者）、與倉弘子、久保加織、石川俊之

地域ボランティア：内藤京子、石橋克也

大津市石山公民館専門委員：小松文郎

2. 事業の目的

農作物の栽培や観察など実体験を重視して農と食の大切さを理解し、食の安全・安心について考えるような「食農教育」が求められている。しかし学校現場において、このニーズに対応できるプログラムの確立、対応できる教員の確保は不十分である。そこで、地域の住民と連携して、小学生の親子を対象に畑体験活動を実施し、「食農教育」の地域連携プログラムを開発する。さらに、教育学部の学生がスタッフとして主体的に参加し、教育現場において「食農教育」に対応できる人材を育成する。

3. 事業の概要

1) 活動の概要

本プロジェクトは、石山公民館・地域ボランティアスタッフ・滋賀大学教育学部の3者の共同企画である。公民館は参加者の募集業務、地域ボランティアスタッフが畑体験の具体的指導、滋賀大学教育学部教員および教育学部の学生（主として環境教育専攻）が体験活動内容の計画立案、指導を行っている。

本活動は、平成14年4月から始まり、今年度は7家族22名が参加した。3月に石山公民館を通じて石山および南郷学区の幼稚園、小学校の児童と保護者を対象に、「石山っ子わくわく親子で畑体験隊」への参加申込書を配布した。4月上旬から滋賀大学自然環境教育施設の農場にて、毎週水曜日の15時から17時まで食農体験活動を実施し、2月まで38回の活動を行った。

2) 本年度の活動内容

本年度の月ごとの実施内容を以下に示す。

実施月	主な活動内容
4月	開始式、自己紹介、農場見学、野菜の播種（トウモロコシ、キュウリ、エダマメ、スイカ、ラッカセイ、モロヘイヤ、オクラ、など）、トマトの鉢上げ、タケノコ掘り
5月	花（マリーゴールド、ヒマワリ）の播種、野菜の生育スケッチ、夏野菜（4月に播種した作物、トマト、ナス、ピーマン、トウガラシ類など）の定植・管理（支柱立て、誘引、わき芽取り、草抜き）、ジャガイモ土寄せ、サツマイモ挿苗、稲のモミ消毒・播種、タマネギ収穫、梅の収穫・梅ジュース・カリカリ梅・梅干し作り、タマネギ収穫、蚕の飼育を開始
6月	ジャガイモ収穫、夏野菜の管理、キュウリ・トマト収穫・試食、田植え、田んぼの草取り、蚕が繭を作る部屋を作製、ジャガイモ試食、カイクについての講話（公益財団法人衣笠繊維研究所 古澤壽治 先生）
7月	田んぼの生き物（ミジンコ、カブトエビなど）観察、夏野菜の管理・収穫・試食（トウモロコシ、トマト、ピーマン、オクラ、エダマメなど）、梅ジュース試飲、藍のたたき染め
8月	夏休みであるが、当番制で畑の管理、水やりを実施
9月	セルトレイに秋冬野菜を播種（キャベツ、ブロッコリー、ハクサイ、カリフラワー）、露地に秋冬野菜を播種（ダイコン、ニンジン、ホウレンソウ、コマツナ、チンゲンサイ、ミズナなど）
10月	セルトレイに播種した秋冬野菜の定植、秋冬野菜の間引き・草取り、ナス、オクラ、ピーマンの収穫、稲刈り・稲架がけ・脱穀、サツマイモ掘り

11 月	チューリップなどの球根植え，ポップコーン試食，焼き芋，干し柿作り，マリーゴールド染め，タマネギ定植，秋冬野菜の間引き・草取り・収穫，CMRU 理工学部・教育学部学生・教員との交流
12 月	干し柿試食，餅つき，しめ縄作り（地域のボランティアの方のご指導），秋冬野菜収穫，米試食
1 月	七草粥・豚汁作り・試食，秋冬野菜収穫，スナックエンドウ定植，節分行事（鬼のお面作り・豆まき）
2 月	紙漉き，雛人形・雛あられ作り，蚕の糸繰り・真綿作り（公益財団法人 衣笠繊維研究所 古澤壽治 先生）
3 月	新型コロナウイルス感染拡大の防止ため活動中止

本年度は，新型コロナウイルス感染拡大の防止の為，3月の活動を行うことができなかったが，2月までの活動では，石山公民館，地域のボランティアスタッフ，滋賀大学教育学部の連携により，円滑に本事業を運営することができた。昨年度に引き続き，飼育・栽培から利用（調理・試食，染色など）までの一連の工程を経験することを目的に活動を行った（写真）。また，今年度新たに，タイ国チェンマイラジャパット大学（CMRU）の理工学部・教育学部の学生・教職員が本学部にて短期研修を実施した際に，野菜の栽培管理や焼き芋，折り紙のプレゼントなどを通して，交流を行った。保護者からは，「子どもたちは，外国の方と交流するのは初めてで，最初は戸惑っていたが，すぐに積極的に交流するようになっていた。国際交流に関する貴重な経験であり，今後もこのようなプログラムがあると有り難い。」という感想が述べられた。



学生との野菜の定植



CMRUとの交流（野菜の手入れ）



CMRUとの交流（焼き芋試食）

子どもたちの印象に残っている活動として，餅つき，藍のたたき染め，焼き芋，焼きトウモロコシなど収穫物を利用する活動が多く挙げられ，飼育・栽培から利用まで一連の工程を行うことが，農場を利用した体験学習を行う上で重要であると考えられた。

また本事業では，滋賀大学教育学部の学生が主体的に本活動に関わるような体制を整え，実施している。稲の栽培，野菜の栽培，蚕の飼育，梅の収穫・利用など学生が各自テーマを持ち，教員や地域ボランティアスタッフと連携して，活動計画の立案，準備，実施，評価を行った。学生の感想から，本事業を通して主体的に子どもや保護者，地域スタッフ，教員と関わることで，体験学習において事前準備，他者との協働，専門性などが重要であることが経験的に学べたと考えられた。

4. 今後に向けて

現在，「食農教育」が求められているが，学校現場では十分に対応できていない。本事業は貴重な「食農教育」を行う場であり，今後も地域と連携して「食農教育」を行っていきたいと考えている。また，本事業で新規の体験プログラムを考案・実践することにより，プログラムの有効性を評価し，学校現場に還元したいと考えている。さらに，多くの学生が主体的に参加しており，将来教育現場で「食農教育」の体験活動を行える人材の育成も積極的に行っていききたい。（森 太郎）

1－21) 地域の伝統野菜の栽培を核とした カリキュラム・マネジメントモデルの開発

1. 事業名および担当者

事業名は、「地域の伝統野菜の栽培を核としたカリキュラム・マネジメントモデルの開発」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部：森 太郎（代表者）、山田 礼（教育学研究科 学校教育専攻 2年生）

甲南第二小学校：山本 寛（校長）、菰田智恵（教務主任）、大菅将史（教諭）

2. 事業の目的

2017年に告示された小学校の新学習指導要領において、カリキュラム・マネジメントの確立が求められている。教育内容の構成が他の教科と異なり、子どもの活動に寄り添った授業展開が求められる教科・領域である生活科や総合的な学習の時間を核としてカリキュラム・マネジメントを実施することが望ましいと考える。

総合的な学習の時間の学習テーマとして、地域特産の農産物の栽培が多くの学校で行われているが、カリキュラム・マネジメントの観点から見ると、教科横断的な教育内容、実施に必要な人的・物的な体制の確保、実施状況の評価と改善について十分でないことが多い。滋賀県甲賀市には、滋賀県が近江の伝統野菜に認定している‘杉谷なすび’と‘杉谷とうがらし’が栽培されている。これまで近隣の小学校第3学年の総合的な学習の時間において‘杉谷なすび’を栽培する学習が行われていたが、学校への聞き取り調査によると、栽培に対する児童の主体性、教科横断的な学習、地域の方や学校内の児童との交流、教師や学校の栽培に関する知識や物的資源が十分でないことが明らかとなった。そこで、総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントの実施モデルを開発するため、地域の伝統野菜‘杉谷なすび’と‘杉谷とうがらし’を学習材として学習プログラムの開発・実践・評価を行なっている。

3. 事業の概要

1) 活動の概要

本研究は、2018年度から滋賀大学教育学部と甲賀市立甲南第二小学校が共同で実施している。第3学年の総合的な学習の時間「そだてタイム」の実施にあたり、校長、教務主任、学級担任との議論により、伝統野菜を栽培する総合的な学習の授業構造図を作成し、年間の指導計画を考案した。地域や地域の伝統野菜への愛着の形成を大きなテーマとし、聞き取り調査で明らかとなった児童自身の栽培に対する主体性、地域の方や学校内の児童との交流などの問題に対して改善できる目標を設定した。また、他教科での学びを活かす教科横断的な学習を取り入れることにし、関連する教科の単元を整理した。加えて、教師間の連携や学習の準備が円滑に進むようにするため、授業外での教師の活動を整理した。また、栽培実施のための人的（栽培を指導してくれる地域の人）・物的（栽培資材）体制を構築した。その結果、これまで課題となっていた、栽培に対する児童の主体性、教科横断的な学習、地域の方や学校内の児童との交流、教師や学校の栽培に関する知識や物的資源の確保について概ね改善することができた。一方、実践を通して、主体的に関わる収穫物の利用、振り返り・まとめの方法、杉谷野菜の生産者との連携について新たな課題が見られた。そこで本年度は、前年度の課題を基に、校長、教務主任、学級担任との

議論により学習プログラムの改善案を考案し、実践・評価を行った。

2) 本年度の活動内容

3年生（1クラス、18名）において、地域の伝統野菜の栽培を中心とした総合的な学習の時間「そだてタイム」を実施した。前年度の実践により明らかになった課題について改善した点を以下に述べる。

主体的に関わる収穫物の利用：前年度は生産物の利用として、夏休み中に無人販売所「杉谷野菜ショップ」を開いた。児童は、児童は看板作りや全校児童への宣伝を行ったが、夏休みのため野菜の購入者と直接関わる機会がないことが課題として挙げられた。本年度は、夏休み明けの9月に、児童が収穫物を調理したり、直接販売に関わったりする「杉谷野菜レストラン・スーパー」を行い、児童の学習意欲を高めることができた（写真1）。

振り返り・まとめの授業づくり：学習活動が夏休みを経て長期間に渡るため、児童が学習を振り返り、まとめることが難しいことが課題として挙げられた。本年度は、栽培活動の内容や活動を通して生じた思いを表現する「杉谷野菜カレンダー」、「紙芝居」の学習を行った。カレンダーには、活動内容を撮りためた写真などと共に時系列で並べ、児童の思いを反映させるために、「嬉しかったこと・楽しかったこと」、「大変だったこと」を2色の付箋に記入し、カレンダーに貼り付けた（写真2）。付箋の内容を比較した結果、大変な活動の後に嬉しい楽しいと感じる児童が多くみられ、探求的な学習における豊かな学習の姿が現れたと考える。さらに、振り返り・まとめた内容を具体的に表現する紙芝居を作製・発表し、児童は、自尊心や成就感を得ていると考えられた。

杉谷野菜の生産者との連携：本学習プログラムを持続可能なものとするには、杉谷野菜の生産者との協力関係を構築することが課題として挙げられ、本年度はそれを実現することができた。伝統野菜を生産する地域の農家と栽培活動などを通して関わっていくことで、地域への愛着形成がみられた。

なお本研究について、①児童の活動の様子が日本農業新聞で紹介される（写真3）、②甲賀市小学校教育研究会環境教育部会授業研究会で研究授業（大菅教諭）と指導講話（森）を行う、③滋賀大学研究ユニットの公開研究会「せいかつ・そうごう研究会」（2月22日開催）において、実践について発表を行う（山田氏）など広く外部に発信することができた。



写真1. 杉谷野菜の手入れ



写真2. 杉谷野菜カレンダー



写真3. 掲載された記事

4. 今後に向けて

本年度は、前年度の課題を基に改善する学習プログラムを考案し、実践・評価した。昨年度の課題に関しては改善されたが、一方で小学校の教職員への質問紙調査の結果、①1学期中に収穫後の杉谷野菜レストラン・スーパーの授業をしたい、②担任の負担軽減が必要であることが新たな課題として挙げられた。今後はそれらの課題について、栽培時期を早める方法の検討、担任の負担軽減のための栽培技術・学校の体制についての検討を行っていきたいと考えている。

（森 太郎）

1-22) 学校アート化計画『グリーンちゃんがやって来た』

1. 事業名および担当者

事業名は「学校アート化計画『グリーンちゃんがやって来た』」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部：藤田昌宏（代表者）

草津市教育委員会：松岡秀樹，山本一成（生涯学習課），田辺裕嗣（幼児課）

草津市立ふたばこども園：南川千秋（園長），関正朗（副園長），左田野篤子（副園長）

2. 事業の目的

本プロジェクトは、子どもたちが多くの時間を過ごす学校園という空間をアート作品で“異化”するもので、数年来藤田が『グリーンちゃんプロジェクト』と銘打って取組んできたアート活動の学校版。アート作品の存在を引き金に、非日常がもたらす子ども等の身の回りの様々な事象の発見（学校園探検や“学校の怪談”の物語創作など）をすることを促す。そして、そこから生まれる色々な反応に呼応する形で、教員保育士が日常の学びに展開し、アートの可能性を広げることを目的とする。

3. 事業の概要

30cm 前後の立体作品『グリーンちゃん』と『ミドリグマ』，ミドリグマの人間サイズの造形物（いずれもプラスチック製）を，日替わりで園庭，教室，遊戯室など設置する場所・数を変えて設置展示する。展示中に起る子どもたちの反応を教職員に観察してもらい，その聞き取りやそこから生まれた活動を記録していく。過年度，附属小学校や大津市立青山小学校と個々に実施してきたプロジェクトだったが，昨年度は草津市教育委員会との連携で草津市内の複数の学校園で実施した。その振り返りから，幼児の反応の高さや保育への組み込みやすさから未就学児に特化して実施した。

（1）連携の経過

6月17日（月）市教委の松岡氏と山本氏と今年度の取組みを協議した。事業の対象を幼児に絞って行なうこと，対象園を昨年度積極的に関わって下さった関先生のおられるふたばこども園とすることを内定した。

7月31日（水）市教委の2人に加え幼児課田辺裕嗣氏とこども園を訪問，南川園長と関副園長と開催の時期と展示方法・場所，開催までの園内での本事業のコンセンサス生成について協議した。



11月8日（金） 市教委2人とこども園を訪問、学校アート化計画についての園内での先生方の反応を聞き取りつつ、園児との出会わせ方・日毎の展開について話し合い、園児や先生方の反応に合わせ、関先生を中心に園の方の判断でフレキシブルに対応してもらうことを確認。

11月15日（金） 園児に気づかれないように留意しながら作品を園に搬入。12月の展示を前にして先生方に実物を手にしてもらい、先生方の本事業への理解やイメージを事前に持ってもらう期間とした。



こども園での展示風景（教室）



職員室前カウンター



園児に隠されたミドリグマ



ミドリグマを抱いてお昼寝



ミドリグマと一緒にママゴト



ごっこ遊び（散髪屋さん）

12月2日（月）～9日（月） 初日にミドリグマを2.3歳児の教室に1体ずつ出現させる。2歳児は赤ちゃん人形同様にママゴト遊びを、3歳児は遊戯室などに連れ歩いたり、創作した話を語る。二日目、1.5歳児の教室にもクマ出現。1歳児で発見した幼児がずっと手放さず添い寝。5歳児では園内の探索がスタート。三日目、4歳児の教室にクマ出現、エントランスにはグリーンちゃんも出現。四日目、園内のクマとグリーンちゃん増殖。園児は日常に戻りぎみ。五日目、人間大クマが玄関に出現、よじ登る園児も。六日目、園児の目を盗んで園内の全ての展示を撤去。

12月16日（月） ふたばこども園にて関先生や左田野先生らを交えて今年度の取組みを分析した。クマなどに強い愛着を示しつつ、個々の反応で独占したり一緒に遊んだり、教職員からの数々のエピソードとその背景にあるそれぞれの保育環境などを聞き取った。

4. 今後に向けて

四年前から始まった『学校アート化計画』だが、いくつかの小学校と幼稚園（こども園）での展開を経て、今年度草津市との連携により乳幼児を対象に行なった。プロジェクトを通じて、小学生らと比べ乳幼児の反応には直情的に強いものがあるのを確認した。しかし、乳幼児だけの活動ではその現象を彼らの日常（保育や生活）の中でさらに広げるには難しく、アートの可能性繋ぐために保育士教員などの働き掛けで“物語”への昇華が必要ではないかと考える。これらをふまえ草津市の「次世代文化体験プロジェクト」ともどう接続するか検討し展開していきたい。

（藤田昌宏）

2 教員養成実践力アップ事業

2 石山プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名は、石山プロジェクトであり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：河口眞佐男（代表者），畑 稔彦

大津市立石山小学校：横山泰史（校長）

大津市立石山幼稚園：衣川洋子（園長）

2. 事業の目的

子どもたちの多様化した課題を抱える今日の学校状況から、新規採用教員といえども、即戦力として実践的指導力や教員としての専門性が強く求められるようになっている。本学部では、平成 17 年度に「石山プロジェクト」を立ち上げ、以後大学近隣の公立小学校と公立幼稚園の協力を得て、学生を恒常的に学校の教育活動に参加させる活動（スクールサポーター活動）に取り組んでいる。参加の学生は全て本人の自主参加である。この活動を通して、学生が子供や学校の実情を体験的に知るだけでなく、具体の場面における子供の心情の理解や教師として求められる対応の仕方など、実践的な指導力を身に付け、教師としての対応力を高めることをねらいとしている。

3. 事業の概要

本事業に対して、当該校園のみならず省察会講師をお願いしている退職女性校長会からの評価は高い。その理由はサポーターとして本事業に参加している学生の意識の高さと教師を目指している純粋な姿にこれからの教育を担う若者への期待の表れである。本年度もほぼ同じ日程で活動と省察会、報告会が実施できた。その概要は幼稚園、小学校ともほぼ同様である。

①春秋の学期に合わせて参加希望を募り、年間 2 クルーの活動期間。

②学生個々の予定を勘案して学校園と相談のうえ各自の活動日時を決める。ほぼ週 1 日。

③月一回の省察会 午後 4 時～5 時 場所は大学 参加は自由

④アドバイザー 幼稚園 1 名 元公立幼稚園長 小学校 退職女性校長会から毎回 2 名

4. 活動内容：各数科等で基礎的な内容の習熟を図る指導補助

各教科や総合的な学習の時間、遠足的行事等での校外学習の引率補助、

生活単元学習（特別支援学級）における指導補助

5. 定例省察会の開催

毎月下旬に幼稚園と小学校の校種別に、省察会を大学で開催。

省察会では、学生が当該月の学校園でのスクールサポート活動を振り返り、やり甲斐や感じたこと自信がついたこと、自らの成長を自覚できたこと、課題に思っていること、悩んだり、戸惑ったりしていること、子どもの言動等をどう理解すればいいか分からなかったこと、指導や教育に当たっておられる先生の意図などについて、悩みや疑問点を出し合い、互いに意見を交流する。この場には学校園での経験豊かな外部講師の先生方を迎えている。先生方からは学生の提示した課題について

明快な返答や励ましなどの指導助言を受けることで、学生自身が課題を明確にし、子どもたちへの対応改善に意欲を高める機会となっている。

6. 学期末報告会の開催

報告会には、学生や指導助言の外部講師と受け入れ校園の教員が一堂に会する。学生一人一人からは、スクールサポートの機会と指導助言をいただいたことへの感謝を述べ、自らの成長と気づきや発見について順番に発表した。また、個々の学生の担当となって指導いただいた学校園の先生からは、ねぎらいの言葉と成果と課題についてコメントをいただいた。最後に、外部講師からの指導助言をいただき報告会を終了した。後日、省察会や報告会のアドバイザーを務めていただいた先生方から下記のような感想などを報告いただいた。

- ・教職を目指す学生の、誠実で、一生懸命な姿勢に感心し子どもたちを観察する視点の良さなどすばらしいものがあった。
- ・自分たちのアドバイスが学生さんたちのお役に立てたかという心配はあった。
- ・学生さんにもいろいろ事情もあったとは思いますが、参加人数が少なかったこと、コートを脱がない礼儀に疎いところや幼さを感じる質問内容にこのまま現場に出て行って大丈夫かと心配になった。
- ・この「石山プロジェクト」がより一層、教職を目指す学生さんのためになるよう、私どももより良いアドバイザーができますよう努力したいと思います。（文責 河口眞佐男）



石山幼稚園省察会



石山小学校報告会

3 出前講座

この出前講座は、滋賀県内の学校等における研修や講演会に教育学部教員を講師として派遣する制度である。既に、教育学部教員は県や市町教育委員会や各学校の依頼を受け、研修講師の役割を遂行している。しかし、これらのネットワークが成立していない場合や新任教員の派遣の場合に限っては、本出前講座は有効なものであろう。

令和元年度の出前講座については、小学校2校、中学校1校、高校3校、特別支援学校2校の計8件の実績であった。他にいくつかの依頼があったが、日程等の関係で成立しなかったケースがある。

多くの教育関係者の方々に、本出前講座を利用していただくため、出前講座一覧を本学部ホームページにアップロードした。下記がその出前講座一覧である。

国語教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
国語教育	近江国と和歌	井ノ口 史 (いのぐち ふみ)	国語教育講座 (日本古代文学)	児童・生徒(中・高) 教員(中・高) 保護者・市民一般	古代から近世まで、それぞれの時代背景を踏まえつつ近江国に関連する和歌を紹介します。近江国(現在の滋賀県内)には、和歌に詠まれた地名が少なくありません。いかなる風景が描写されているのか、和歌を通じて近江国の魅力を再発見することをめざします。
国語教育	書とその周辺	中村 史朗 (なかむら しろう)	国語教育講座(書道)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	人はどのようにして「書的美」を自覚するようになったのでしょうか。王羲之や空海の筆跡はどこがそんなに上手いのでしょうか。生活の場において“手書き”の機会が減って、書という表現の領域は失われてしまうのでしょうか。書と周辺のさまざまな問題を取り上げます。講義と実習をあわせて実施することも可能です。
国語教育	国語教育における学びの探究	長岡 由記 (ながおか ゆき)	国語教育講座 (国語教育学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特)	近年、さまざまな言語活動を取り入れた国語学習が行われています。国語の学習における学びの手応えは必ずしも得やすいものではなく、言語活動を取り入れた学習の成果と課題も明らかになりつつあります。そこで、演習を交えた講義を行い、国語教育における学びについて具体的な学習材や学習指導法を取り上げながら探究していきたいと思います。
国語教育	唐詩を読もう	二宮 美那子 (にのみや みなこ)	国語教育講座 (中国古典文学)	生徒(中・高) 教員(小・中・高) 市民一般	中国古典詩を代表するのが唐詩(唐代に作られた詩)です。唐詩には、古くから日本人に愛されてきた多くの素晴らしい作品があります。この講義では、作品の背景を丁寧に解説しながら、漢字一文字一文字にこめられた意味を大切に唐詩を読み解き、その豊かな世界をご紹介します。
国語教育	方言を考える	松丸 真大 (まつまる みちお)	国語教育講座 (日本語学/方言学)	生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	ひとくちに日本語といっても、その内実は人によって、または場面によって異なります。その中でも地域による言葉の違い(=方言)は多くの人が興味を持つテーマです。この講義では日本語の方言をとりあげ、なぜ、どのように方言があるのかを考えていきます。この授業を通して、言葉について考えることの楽しさに気づいていただければ幸いです。

社会教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
社会科教育	地理から考える物語の舞台	安藤 哲郎 (あんど う てつろう)	社会科教育講座 (地理学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・特) 市民一般	説話などの古典を読むと、いくつか地名が出てきます。こういった地名と物語の内容を手がかりとして地図を作りながら考えると、物語が作られた時代の人々が物語の舞台となった場所についてどのような認識を持っていたのかが分かることがあります。地図やパネルを使いながら、地理から物語の舞台について一緒に考えてみましょう。
社会科教育	史料を基礎と日本史 (前近代史)	宇佐見 隆之 (うさみ たかゆき)	社会科教育講座 (日本史学／ 日本中世史)	児童・生徒(小6以上) 教員(小・中・高)	歴史の記述は、すべて史料に基づいて行われています。このため、記述の背景にある史料の理解なしに理解できません。史料と教科書の記述を照らし合わせながら日本前近代史への理解を深めましょう。
社会科教育	古代ローマ史にみる 暖味な「史実」	大清水 裕 (おおしみず ゆたか)	社会科教育講座 (西洋史／ 古代ローマ史)	児童生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	歴史学は、様々な史資料を用いて過去の社会を再構成しようとする学問です。しかし、そこで用いる史資料が互いに矛盾していたり、あるいは荒唐無稽だったりすることは少なくありません。本講義では、古代ローマ史の中から有名な事件を取り上げ、人口に膾炙している「史実」の暖昧さと、「史実」を確定しようとする歴史学の営みをご紹介します。
社会科教育	論理学初歩	齋藤 浩文 (さいとう ひろふみ)	社会科教育講座 (哲学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	論理学への入門として、以下の2つのいずれか、または、両方について講義します。 (1) 形式論理学の初歩について紹介しながら、論理とは何か、そして、論理的であるとはどういうことを考えます。 (2) 非形式論理学を背景として成立したクリティカル・リーズニングについて、その基本の紹介と実践を目指した演習を行います。
社会科教育	滋賀の近代史	馬場 義弘 (ばんば よしひろ)	社会科教育講座 (政治学／歴史学)	市民一般	明治前期に滋賀県の県令(のちの県知事)を務めた松田道之(初代、明治4年11月～明治8年3月)、籠手田安定(二代、明治8年5月～明治17年7月)を中心に、近代国家の形成と滋賀県政について考えます。
社会科教育	景観写真の観賞と 教材化	松田 隆典 (まつだ たかのり)	社会科教育講座 (人文地理学)	児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高) 保護者・市民一般	WEB上に多く掲載されている景観写真の観賞の仕方について、実例をもとにわかりやすく説明するとともに、社会科や地歴科・公民科のための教材化の可能性について示します。具体的テーマとしては、視覚的にわかりにくい気候を植生写真で説明したり、国際理解のために必要な社会的コンテキストを都市景観写真などで紹介します。
社会科教育	身近な事件や話題をもとに法・裁判の役割 を考える	渡辺 暁彦 (わたなべ あきひこ)	社会科教育講座 (法学／ 日本国憲法)	生徒(小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	私たちが「裁判員」として裁判に関わる時代となりました。法や憲法、そして裁判に対する関心も高まっています。本講義では、最近の身近な事件や話題を取り上げ、実際の判決文なども活用しながら、日本国憲法や裁判についての理解を深めていきたいと考えています。

数学教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
数学教育	正多面体とその数理	篠原 雅史 (しのはら まさし)	数学教育講座 (離散幾何学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・高・特)保護者 市民一般	正多面体はプラトンの多面体として古くから知られていて、正四面体、正六面体(立方体)、正八面体、正十二面体、正二十面体の5種類があります。実際に正多面体を作ったり、展開したり、計算したりすることを通して、正多面体の対称性やその美しさを体感してもらうことを目標とします。
数学教育	無限の考え方	神 直人 (じん なおんど)	数学教育講座 (解析学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者 市民一般	私たちは小学校の頃から無限の考え方を利用しています。無限の考え方を利用すると多くのことが明らかになる一方で、無限のパラドックスというものも存在します。この無限の持つ二面を紹介することで算数・数学の面白さ、考えることの楽しさに気づいてもらえればいいと思います。
数学教育	非線形現象の解析	鈴木 宏昌 (すずき ひろまさ)	数学教育講座 (解析学)	生徒(高)教員(中・高)	私たちの身の回りで見られる様々な非線形現象は、しばしば数理モデル方程式で表されます。本講義では、数理生物学における生物個体群のモデルや、化学反応のモデル方程式の解析を通じて、数学と自然科学との関わり的一面を紹介します。モデル方程式にもとづいた計算機シミュレーションも紹介する予定です。

分野	題名	講師	講座	対象	内容
数学教育	算数・数学教育の理論と実際	高澤 茂樹 (たかさわ しげき)	数学教育講座 (数学教育学)	教員(小・中)	算数・数学科の教授・学習過程について、理論的研究を教育実践にどのようにいかすかを検討する。特に、教師として子どもたちの数学的認識をどのように捉え、それを基にしてどのように指導するべきかについて考えたい。
数学教育	江戸時代の数遊びから見る現代数学	長谷川 武博 (はせがわ たけひろ)	数学教育講座 (代数学)	教員(中・高) 児童生徒(高)	江戸時代の和算家 吉田光由(みつよし)によって書かれた和算書「塵劫記(じんこうき)」に収録されている文字遊び・数遊びに「目付字(めつけじ)」・「継子立(ままこだて)」などがあります。これらの遊びを紹介し、その背後に隠れている数学を考えます。具体的にはn進法や数列などが隠れています。
数学教育	数学的ジレンマを使った対話による算数・数学科授業	渡辺 慶子 (わたなべ けいこ)	数学教育講座 (数学教育学)	教員(小・中・高)	「算数・数学科の授業で先生と児童・生徒たちが如何にして対話をし、新たな知識を作り上げていくのか」について、具体的な教材(学習・指導の内容、具体的な問題)をもとに議論します。対話型授業の構造と展開を探究した上で、「話し合い」を取り入れた授業における教師の役割についても議論したいと思います。

理科教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
理科教育	コミュニケーショントレーニング	加納 圭 (かのう けい)	理科教育講座 (科学コミュニケーション)	児童・生徒(中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	滋賀大学に通う大学生が授業に求めていること第1位(滋賀大キャリア通信:サンクス2013年1月7日号より)であった「コミュニケーション能力」の向上を目指したトレーニングプログラムです。科学の内容について「伝える・伝える・分かち合う」ができるようになります。
理科教育	細胞をつくっている物質・脂質	糸乗 前 (いとのり さき)	理科教育講座 (生化学)	生徒(中・高)	生物を形作っている細胞は脂質でおおわれた袋で、その外側には特有の成分が含まれています。その成分を調べることは、細胞にとってあるいは生物にとって重要な情報を与えてくれます。本講義では「セラミド」などの、どこかで聞いたことのある脂質を含め、色々な生き物の脂質の話とどのように調べるかなどのお話をします。
理科教育	太陽の科学	大山 真満 (おおやま まさみつ)	理科教育講座 (太陽物理学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特)	太陽は、宇宙に浮かぶ平凡な星の一つに過ぎない。しかし、地球に直接的に影響を与え、その姿を詳細に観測できる唯一の恒星である。この太陽に焦点をあて、最新の画像や動画も用いながら、太陽の素顔を紹介する。
理科教育	物理学におけるシミュレーション方法	神山 保 (こうやま たもつ)	理科教育講座 (物理学)	生徒(高) 教員(高)	自然科学の研究は観測と実験を基礎にしていますが、両方とも難しい場合や、現象を理解するためにたてられた理論の検証にシミュレーションが使われます。液体気体の相変化をはじめとする物質における様々な相転移に対するコンピュータシミュレーションの方法を紹介します。エクセルを使った誰でも簡単にできる方法もお話します。
理科教育	物性物理学入門	恒川 雅典 (つねかわ まさのり)	理科教育講座 (物理学／物性物理学)	生徒(高) 教員(高)	「物性」といってもなじみが薄いかもしれませんが、実は「物性物理学」は素粒子・原子核・宇宙物理学と並ぶ分野の1つです。最新の科学技術を根拠から支えている物質科学の中でも物質の成り立ちや現象などを、量子力学や統計力学などの物理的な考え方・手法の立場から研究するのが「物性物理学」です。本講義では、身近な例をあげながら「物性物理学」についてお話します。
理科教育	私たちの化学	徳田 陽明 (とくだ ようめい)	理科教育講座 (無機化学／物理化学)	教員(小・中・高)	化学が私たちの暮らしをいかに豊かなものとしているかについて講習します。また、小中高での学びがどのように大学に接続するのかについて酸とアルカリをテーマに説明します。準備や片付け(廃棄を含む)の簡単な化学の実験を体験して頂き、生活用品を使った実験についても紹介します。
理科教育	遺伝情報とは何か？	古橋 潔 (ふるはし きよし)	理科教育講座 (生物学)	生徒(高)	生命科学は近年目覚ましい進歩を遂げていますが、DNAと遺伝子の違いはおわかりでしょうか？この講座では遺伝情報がどのようなもので、どのように使われているかについて、身近な例を挙げて、しかし最先端の技術によって得られた知見も盛り込みながら説明します。

音楽教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
音楽教育	ピアノ演奏法	犬伏 純子 (いぬぶし すみこ)	音楽教育講座 (器楽／ピアノ)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	合唱や独唱の伴奏について、歌とのアンサンブルとしての役割を認識しながら、どのように音楽を組み立て、表現の可能性を広げるかを受講者の演奏をとおして考えたいと思います。
音楽教育	現代社会と音楽	杉江 淑子 (すぎえ よしこ)	音楽教育講座 (音楽科教育)	教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	現代社会における音楽の多様な姿について、若者文化、世代、地域社会、マスメディアといった視点からとらえらるとともに、文化政策や教育との関連について考えます。
音楽教育	オーボエ演奏法／ 木管アンサンブル	中根 庸介 (なかね ようすけ)	音楽教育講座 (オーボエ／ 木管合奏)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	オーボエの経験者を対象に、基本的奏法を学び、練習曲集などを用いて音楽的な表現を学びます。木管を中心としたアンサンブル(木管四重奏、五重奏、ピアノと管楽の五重奏、六重奏、など)を通して、より高度な音楽作りを学びます。
音楽教育	楽しい音楽づくり	林 睦 (はやし むつみ)	音楽教育講座 (音楽教育)	教員(幼・小・中・高・特)	音楽づくり、創作のワークショップをします。教師向けのワークショップや講習会、児童・生徒向けの授業のデモンストレーションもします。楽器がなくても、ピアノが弾けなくても、おもしろい音楽を作る方法があります。楽しく音楽をつくり、子どもたちが自らの表現に目覚める瞬間と一緒に体験できたらと思います。
音楽教育	音による表現を めぐって	若林 千春 (わかばやし ちはる)	音楽教育講座 (作曲／音楽理論)	教員(中・高・特) 保護者・市民一般	お芝居の台詞に、その場に適した演技があるように、音楽にもそれぞれ適切な表現の方向付けがあります。「ここで音楽はどんな台詞を演じているの？」という問題を、一緒に考えてみましょう。楽譜に書かれていない「とても大切なこと」を見つけたり、簡単な音楽文法のおさらいや、創作の実践などを通して、音による表現を共に深めてゆく場を体験してみましょう。
音楽教育	本当の「声」と出会う～ ヴォイストレーニング～	渡邊 史 (わたなべ あや)	音楽教育講座 (声楽)	児童・生徒(小4年～・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 その他(企業社内研修、 マナー講座等)	人間の表現ツール、コミュニケーション手段として「声」は重要な役割を担っています。みなさんの「声」の可能性を見つめなおしてみませんか？発声ストレッチ、呼吸トレーニングを経て、身体を芯から使いながら「声」と向き合う時間です。歌に、そして朗読にも、ちょっとしたコツで生まれる大きな変化を楽しみにご参加ください。その「声」を用いた歌唱表現まで踏み込むことも可能です。歌唱、合唱等のブラッシュアップにも、機会をご活用ください。

美術教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
美術教育	子どもの絵の見方、描かせ方、造形遊びの すすめ方	新聞 伸也 (にいげき しんや)	美術教育講座 (美術教育)	教員(幼・小・中)	子どもの絵の見方や描かせ方、また「造形遊び」の具体的な指導方法について、各学校の先生方の課題に応じながら講義や演習を行います。
美術教育	入門アート～ラクガキから アール・ブリュットまで～	藤田 昌宏 (ふじた まさひろ)	美術教育講座 (彫刻／現代美術)	児童・生徒(小4以上・中・高) 教員(幼・小・高・特) その他(福祉関連作業所など)	ラクガキを描くことから始めます。ラクガキを見せあいっこし、ラクガキの名作を鑑賞？し、そこから見てくる表現の楽しさ・不思議さを感じてみてください。そこからの展開は、「アールブリュット」「速写クロッキー」「エガオ絵」「目隠し彫刻」などなど、受講してくださる顔ぶれやリクエストでアレンジします。
美術教育	学びが深まる 「造形遊び」 (子供の主体な 探究活動としての 図画工作)	村田 透 (むらた とおる)	美術教育講座 (美術科教育)	幼児(4・5歳)・児童(1～6年) 教員(幼・小)	「造形遊び」は、準備や後片付けが大変で、抵抗があると思っていませんか？「造形遊び」で、子供は楽しく意欲的だけど、「遊びの中に学びはあるの？」と思っていませんか？「個性的だよな」「いろいろあっていいよね」で、子供の「造形遊び」への評価を思考停止にしていますか？「造形遊び」には、表現の多様性(現象)と学びの深まり(探究)があります。現場で明日から実践できる題材体験を通して、「造形遊び」の学び・楽しさ、題材開発、指導や支援の在り方について学びます。
美術教育	グラフィックデザインの 世界	世ノー 善生 (よのいち よしお)	美術教育講座 (グラフィックデザイン)	生徒(中・高) 教員(小・中・高) 保護者・市民一般	グラフィックデザインでは、ポスターや新聞広告などの広告物、パッケージ、雑誌、書籍装丁など様々なものを対象としますが、これらの多くは大量生産されて消費されてゆきます。しかしそのようなものだから、漫然と作られた価値の低いものという訳ではありません。ここでは図版資料を提示しながらその素晴らしさについてお話ししたいと思います。

保健体育教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
保健体育教育	①ストレスと上手に付き合う方法 ②良質な睡眠とは	大平 雅子 (おおひら まさこ)	保健体育講座 (衛生学／健康科学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	①誰もが聞いたことがあるストレスという言葉。その言葉の本来の意味を解説しながら、ストレスと「上手に付き合う」方法について様々な視点から考えていきます。 ②エビデンスに基づいて、良質な睡眠とは一体何かを考えていきます。
保健体育教育	スポーツと国際交流・異文化と理解	平井 肇 (ひらい はじめ)	保健体育講座 (体育学／スポーツ社会学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・中・高・特) 保護者	・スポーツの果たす社会的、文化的役割について、各国のスポーツ事情を通して紹介します。 ・スポーツを通じた国際交流や異文化理解の意義と実際について紹介します。
保健体育教育	生理学の基礎に基づいた効果的な運動・トレーニング	松田 繁樹 (まつだ しげき)	保健体育講座 (体力科学／生理学)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	運動・トレーニングを行う際には、ヒトの生理的特徴や科学的知見に基づいた合理的なトレーニングをするべきです。本講義では、運動生理学の基礎を踏まえたうえで、効果的な運動・トレーニングについて考えていきます。

技術・情報教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
技術・情報教育	金属材料のこれから	磯西 和夫 (いそにし かずお)	技術教育講座 (金属加工学／粉末冶金)	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	金属材料は最も多く用いられている材料の一つである。最近、既存の金属をしのぐ材料特性が求められている。 このような材料は溶解－塑性加工－切削による従来からの加工が不可能な場合が多い。その一解決法が粉末を用いた素材製造・加工・成形法である。粉末冶金法による材料開発と加工について解説する。
技術・情報教育	教育工学的手法を用いた教育環境の改善	岩井 憲一 (いわい けんいち)	情報教育講座 (認知科学／教育工学)	生徒(中・高) 保護者	教育環境は、慢性的な人材・予算不足等の問題から、これまで以上に質の高い教員の採用や情報ネットワークの導入による資源の共有、および、新しい教育手法の検討が求められています。 本講座では、これまで行ってきた学習指導案の電子化や情報ネットワーク環境等の ICT 導入事例を通じて教育環境の電子化について提案します。
技術・情報教育	一本の木から椅子をつくる	岳野 公人 (たけの きみひと)	技術教育講座 (技術教育／環境教育)	教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	森林環境の有効利用の観点から、伐採から製材、椅子作りのプロセスをすべて人間の手でおこなう方法を紹介する。 米国では、グリーンウッドワーキングといい、日本の木地師が山にこもって、器づくりをしていたころの技術と同様の伝統的な手法である。作業できる場所が確保できれば、実際の作業を体験するワークショップを開催することもできる。
技術・情報教育	多様な生物と生態的ネットワーク	服部 昭尚 (はっとり あきひさ)	情報教育講座 (生態学)	生徒(高) 保護者	生産者と消費者、分解者から構成される生態系に、なぜ多様な生物が存続しなければならないのでしょうか。 具体的に何種、絶滅すると、生態系は崩壊するのでしょうか。観光地として人気のサンゴ礁に焦点を当て、多様な生物が構成する好循環のシステムを紹介しながら、生態系と生物多様性、そして絶滅の意味を考えます。
技術・情報教育	宇宙の誕生と進化	穂積 俊輔 (ほづみ しゅんすけ)	情報教育講座 (天体物理学)	市民一般	宇宙はビッグバンという大爆発から始まったとされています。では、なぜそのような大爆発があったことがわかったのでしょうか。さらに、「大爆発」とはガス爆発のようなものなのでしょうか。このような宇宙の誕生から始めて現在の私たちが見ている宇宙の姿を、人類の宇宙観の変遷とともに解説していきます。
技術・情報教育	動物の行動を真似るロボット	右田 正夫 (みぎた まさお)	情報教育講座 (認知科学／ロボット工学)	生徒(高)	外界からの情報に応じて、自ら適切な行動を選択できるロボットを総称して「自律ロボット」といいます。 自律ロボットが動作する環境はとても複雑ですが、さまざまな動物の行動様式を真似てロボットの行動をデザインすることでうまく対処できる場合があります。本講義では、そのような自律ロボットの研究事例を紹介します。
技術・情報教育	複雑系入門－フラクタルとは何だろう－	水上 善博 (みずかみ よしひろ)	情報教育講座 (コンピュータシミュレーション)	生徒(高)	海岸線や川の流れ、雲の形や木の枝ぶりなど、自然の造形には複雑な形をしているものが多く見られます。複雑な形をした図形の特徴を表す方法にフラクタルがあります。 本講義では、フラクタルという考え方を分かりやすく解説し、形の複雑さを知るための指標としてのフラクタル次元の求め方を学びます。

家庭科教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
家庭科教育	何をどう食べる？ —自分のための食べ物、 食べ方—	久保 加織 (くぼ かおり)	家政教育講座 (食物学)	教員(小・中・高・特) 市民一般	誰もがいつでも食べたいものを食べられる現在であるからこそ、どの年代の人も自分の健康のためには何をどれだけどのように食べるのがいいか、きちんと理解しておくことが大切です。 様々な情報と食品表示が氾濫する中で、自分のための食材選びと食べ方について考えます。(具体的にどのような点に重点をおくかは、対象者に応じて相談させていただきます。)
家庭科教育	くつろぎの住まい	田中 宏子 (たなか ひろこ)	家政教育講座 (住居学)	児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	住まいは、雨や風、暑さ・寒さや様々な過酷な自然現象から人々を守る役割があります。 また、そこで暮らす人々がゆとりと休養し、エネルギーを蓄えるなど、住まいは人々の心身の健康を維持する役割ももっています。これらの役割を果たすためにはどのような工夫が必要でしょうか、ともに考えてみたいと思います。
家庭科教育	家族の機能	平松 紀代子 (ひらまつ きよこ)	家政教育講座 (家庭経営学)	児童・生徒(幼・小・中・高) 教員(幼・小・中・高) 保護者・市民一般	家族の存在はどのような機能を果たしているだろうか。 社会で一番小さい組織(システム)である家族について、客観的に振り返り、時代、国、あるいは同じ時代に同じ地域に暮らしていても異なる家庭の文化にも目配りしつつ、それぞれの価値観の違いをふまえ、それぞれの価値観を尊重することの大切さについてお話します。
家庭科教育	衣生活と環境	與倉 弘子 (よくら ひろこ)	家政教育講座 (被服学)	教員(小・中・高・特) 市民一般	環境問題に配慮した衣服の着装行動について解説します。 衣服による気候の調節と省エネルギー(暑さ寒さに応じた着方、クールビズ・ウォームビズなど)、有害紫外線と健康の関わりや衣服による紫外線対策について、衣服のリユース・リサイクルなど、環境保全に関わる衣生活の問題について考えてみましょう。

英語教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
英語教育	人間の言葉の能力について：母語の獲得、外国語の習得と脳のはたらき	大嶋 秀樹 (おおしま ひでき)	英語教育講座 (英語科教育／言語心理学)	児童・生徒(小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	ことばの能力は、生き物の中で、人間だけが持つ能力です。 人間は、ことばを覚え、ことばを使ってコミュニケーションをします。 ことばの能力には、音声、語彙、文法、意味の領域で、脳の活動が大きく関わっています。 講義では、人間の持つことばの能力、ことばの能力と脳の働き、母語の獲得、外国語の習得について、最新の言及の知見にも触れながら、話を進めようと思います。
英語教育	アメリカ小説を読む	林 直生 (はやし なお)	英語教育講座 (アメリカ文学／アメリカ文化)	市民一般	詩や小説などの文学作品は、それ自体が独立して存在するのではなく、作家が作品を執筆した当時またはそれ以前の時代の社会や文化と密接な関わりを持っています。 この講義では、主に 20 世紀前半のアメリカで書かれた小説を取り上げて、作品とその背景について見ていきます。
英語教育	言語学への招待	板東 美智子 (ばんどう みちこ)	英語教育講座 (言語学)	生徒(高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	・なぜひとはことばをもっているのか(言葉の起源) ・なぜひとは3歳ぐらいになるとことばをしゃべり始めるのか(普遍文法) ・アメリカ人の子供のように学習すれば日本人も英語がべらべらになるのだろうか(言語臨界期仮説) ・ことばのかたち・いみ・ならび(形態論・意味論・統語論) ・会話の意図は会話に出てこない(語用論) などについて紹介します。
英語教育	イマージョン教育と英語学習	田中 佑美 (たなか ゆみ)	英語教育講座 (英語教育学)	教員(小・中)	本講義では、イマージョン教育と英語学習、特に英語学習に対する動機づけについてお話しします。 イマージョン教育はカナダで始まった第二言語を使って理科や社会などの教科を指導するバイリンガル教育の一つです。 日本における英語によるイマージョン教育にも触れながら、英語を通して教科を学ぶことによる英語学習と英語学習に対する動機づけについてご紹介します。

学校教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
学校教育	教育法規を読み解く	藤村 祐子 (ふじむら ゆうこ)	学校教育講座 (教育制度学)	教員(小・中)	教育法規は、教育の枠組みとなる重要な要素です。様々な教育改革が進められる中で、教育法規に目を通し、教育に何が求められ、どの方向に進もうとしているのか、改めて考えてみたいと思います。
学校教育	『エミール』を読む ～生きるための教育と 大人の役割について	三輪 貴美 (みわ きみえ)	学校教育講座 (教育学・教育哲学)	保護者	ルソーによって書かれた『エミール』は、人が教育をまさに「生きるために」必要とした時代のものであり、その思想は時代や文化の違いを越えて現代の私たちにも「生きること」の意味を考える材料を提供してくれます。それが書かれた時代状況等にも触れながら、“生きるための教育と大人の役割”について考えます。
学校教育	記憶のしくみと 効果教授・学習	井上 毅 (いのうえ たけし)	学校教育講座 (認知・学習心理学)	教員(小・中・高・特)	認知心理学の観点から人間の記憶システムに関して概説したうえで、効果的な学習につながる教授・学習上の工夫についてお話しします。
学校教育	他者理解の コミュニケーション 心理学	蔵永 瞳 (くらなが ひとみ)	学校教育講座 (社会心理学)	教員(幼・小・特) 保護者・市民一般	人間は、他者とたくさんのコミュニケーションをとりながら生活する生物です。本講座では、対人コミュニケーションのメカニズムとつまずきのポイント、人間が持つコミュニケーション能力の基盤である「他者の気持ちを理解する」力について、心理学の観点からお話しします。
学校教育	キャリア教育の 理解と推進	若松 養亮 (わかまつ ようすけ)	学校教育講座 (キャリア心理学)	教員(幼・小・中・高・特)	進路指導や就職指導と混同されがちなキャリア教育について、その出自や必要性、中教審答申に示された内容について解説し、具体的な推進方法や運営上の課題について、これまでの実践例にふれながらお話しします。
学校教育	子どもが「こころ」 に気づく時	渡部 雅之 (わたなべ まさゆき)	学校教育講座 (発達心理学)	教員(幼・小・特) 保護者・市民一般	幼い子どもたちは、自分自身の中にある「こころ」という存在を、十分に意識することができません。他の人間にも「こころ」があり、それが自分の「こころ」と同じ働きをしていることに気づくことで、他者への共感や理解が深まります。こうした「こころ」への気づきの発達過程についてお話しします。
学校教育	カウンセリング マインドを育む	芦谷 道子 (あしたに みちこ)	学校教育講座 (臨床心理学)	教員(幼・小・中・高) 保護者・市民一般	さまざまなこころの問題が起こっている現代において、どのように人と関わればよいのか、どのように子育てや子どもとの心理的援助をすればよいのか、悩みを抱えておられる方も多いことと思います。自己理解や他者理解のヒントとなるよう、カウンセリングの基本的な概念や、カウンセリングマインドについて、絵本や教材、体験を通して学んでいきます。
学校教育	教師－生徒関係 の変容とこれから	太田 拓紀 (おた ひろき)	学校教育講座 (教育社会学)	教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	現在、教師と児童生徒との関係性における危機が広く叫ばれています。では、過去の教師と生徒の関係は良好だったのでしょうか。そもそも、問題視されはじめるのは、いつ頃からでしょうか。この講義では、わが国における教師－生徒関係の歴史的変化を概観し、その上で、今後の望ましい関係性のあり方について考えてみたいと思います。

幼児教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
幼児教育	子どもの育ちと絵本	菅 眞佐子 (すが まさこ)	幼児教育講座 (幼児心理)	児童・生徒(幼・小・中・高) 教員(幼)	絵本を読み聞かせてもらうことで、子どもは自らの内面世界を豊かに作り上げていくとともに、周りの人とつながることの楽しさやその大切さを感じていきます。子どもの育ちとの関連で注目される絵本をいっしょに楽しみながら、子どもの育ちと絵本の関係について考えてみましょう。
幼児教育	幼児期の遊びを豊かに する環境構成	山本 一成 (やまもと いっせい)	幼児教育講座 (幼児教育学)	生徒(高) 教員(幼・小)	幼児は遊びを通して様々なことを学んでいきます。そして、幼児が夢中になって遊ぶためには、子どもたちの遊びを可能にする環境が整えられている必要があります。この講座では、子どもの遊びの大切さや、遊びにかかわる環境の在り方について、理論と実践の両面から学んでいきます。

障害児教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
障害児教育	障害の原因と最近の話題	江原 寛昭 (えはら ひろあき)	障害児教育講座 (小児神経学)	教員(幼・小・中・高・特)	近年、遺伝医学などの研究の急速な進展により、病気や障害の原因の解明が急速に進展しました。 この講義では、それらの研究の成果を中心に、障害に関するトピックスを概説します。
障害児教育	ちよつとたちの発達と教育	窪田 知子 (くぼた ともこ)	障害児教育講座 (特別支援教育)	教員(幼・小) 保護者	私たちの身のまわりにいる“ちよつと気になる子どもたち(主に、発達障害の子どもたち)”のことをどう理解すればよいのか？家庭や学校でどのような関わりをすれば、彼らの健やかな育ちを支え励ますことができるのか？保護者とつまく連携するには…？などのテーマについて、一緒に考えてみたいと思います。
障害児教育	障害のある子の発達と教育	白石 恵理子 (しらいし えりこ)	障害児教育講座 (障害心理／障害児教育)	教員(幼・小・中・高・特) 保護者	主として知的障害や発達障害をもつ子どもたちの発達と教育について考えます。 (発達の時期等については、ご相談に応じます。)
障害児教育	支援の必要な子どもと教育	羽山 裕子 (はやま ゆうこ)	障害児教育	教員(小・中)	通常学校に在籍する支援の必要な子どもたちは、学校生活のどこにつまずきを抱えがちなのか。どのような支援が可能なのか。一緒に考えていききたいと思います。
障害児教育	「気になる」児童・生徒の発達の理解と支援	松島 明日香 (まつしま あすか)	障害児教育講座 (障害児心理)	教員(幼・小・中・高・特) 保護者	友達とトラブルになる、じっとしていられないなど、対人面や行動面において「気になる」児童・生徒の存在が目立っています。 その支援と対応には彼らの困難さを発達の的に理解していくことが重要です。 本講義では、この時期の発達を通して「気になる」児童生徒の困難さをどのように理解し、対応していけば良いのかについて考えます。

環境教育関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
環境教育	湖沼の生態系	石川 俊之 (いしかわ としゆき)	環境教育講座 (湖沼生態学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	湖沼の水の中には一見すると何も無いように見えます。 しかし、そこには目に見えない小さな生き物が活躍する実に豊かな世界があります。 琵琶湖を例に生物と生態環境の関係について考え、自然環境を大切にするためにできることを考えます。
環境教育	食料生産と環境	森 太郎 (もり たろう)	環境教育講座 (園芸学/植物病理学)	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	私たちの生活に欠かせない食料生産と環境との関係について、食料生産は環境にどのような影響を与えているのか？ 一方、食料生産は環境からどのような影響を受けているのか？の観点から講義し、持続可能な食料生産について考えます。

教職大学院担当教員関係分野

分野	題名	講師	講座	対象	内容
教職大学院	幼児の健康と生活	奥田 援史 (おくだ えんじ)	幼児教育講座 (健康教育)	教員(幼) 保護者	幼児の健康と生活の関連について概説します。 また、「幼児期運動指針」(文部科学省)を解説します。
教職大学院	学校の危機管理	河口 眞佐男 (かわぐち まさお)	教育実践総合センター (学校管理)	教員(幼・小・中・高・特)	今日、学校をとりまく環境には様々な危機が存在します。 児童生徒の安心安全を守ることが何より最優先課題です。 最近の国の動向をふまえ、近年の事例から、事件・事故の発生前、発生直後、発生後の学校管理について取るべき対応について分析・検証し、安全教育、安全管理、組織対応の内容や課題について考えていきます。

3 出前講座

分野	題名	講師	講座	対象	内容
教職 大学院	社会科の学力と パフォーマンス評価	岸本 実 (きしもと みのる)	社会科教育講座 (社会科教育)	教員(小・中・高)	社会科の思考・判断・表現の学力を身につけさせるために、パフォーマンス評価の指導と実践が求められています。授業の中の15～20分の中心活動、1時間そして1単元の授業など、生徒の思考・判断・表現のパフォーマンスをどのように指導し、評価すればよいのか、ワークショップ形式で考察します。
教職 大学院	新しい時代が 求める資質・能力 を伸ばす教育課程・ 指導・評価	岸本 実 (きしもと みのる)	高度教職実践専攻 (教育方法学)	教員(小・中・高)	新しい学習指導要領により整理された、新しい時代が求める資質・能力を伸ばすためには、学校を基礎に教育課程を編成し、カリキュラムマネジメントを適切に実施していくことが求められています。また単元や授業において確実にその資質・能力を身につけさせる学習指導と評価の在り方が問われています。本講座では、学校、学年、教科など学習者の状況に合わせて、これらの問題を考察します。
教職 大学院	体育授業における 指導と評価の一体化	辻 延浩 (つじ のぶひろ)	保健体育講座 (体育科教育)	教員(小・中・高)	子どもたちが学び合い育ち合う体育授業はどのように実現できるのか。いま教師に求められる考え方や指導性はどのようなものか、協同的な学びをどのようにデザインし、評価していけばよいのか等、学習集団づくりの理論と方法について考えていきたいと思います。
教職 大学院	自然景観と自然災害／ 防災教育と学校安全	藤岡 達也 (ふじおか たつや)	理科教育講座 (科学教育／防災教育)	児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	本講義では、次の3つのテーマを取り扱っています。テーマの選択等は可能です。 ① 自然と人間との関わり(持続可能な社会とこれからの環境教育) ② 自然景観の形成・活用と自然災害(国立公園・ジオパークと近年発生した自然災害など自然の二面性について) ③ 防災教育と学校安全・学校危機管理(子供を事件・事故災害から守るために)
教職 大学院	授業実践の事例研究	堀江 伸 (ほりえ しん)	学校教育講座 (教育方法学)	教員(小・中)	学校で授業研究を実際にされることを前提に引き受けることにしています。ひとりの教師や何人かの教師が、ある目的で授業研究されるのを参観し、その後の検討会に参加させていただくという形式です。その目的は、問いませんが、以下の教科に限らせていただきます。国語科、社会科、図工・美術科、道徳、総合の授業です。授業を改善するという目的でも、校内研究のテーマに即した授業研究でもかまいません。進め方などは相談に応じます。
教職 大学院	メディアと教育	松原 伸一 (まつばら しんいち)	技術教育講座 (メディア情報学)	教員(小・中・高) 市民一般	①「メディアの本質を科学する」、②「メディアの利用を実践する」、③「メディアの内容を吟味する」という3つの視点から、メディア教育の在り方について講義する。①では、いろいろなメディアを取り上げ、②では、コンピュータやインターネットなどの情報メディアや、e-Learning/WBL(ネットワークやホームページ利用の学習)などの教育メディアを取り上げ、③では、メディアリテラシーを取り上げて、講義を行います。
教職 大学院	家庭科教育の理論 と実際	矢野 由起 (やの ゆき)	家政教育講座 (家庭科教育)	教員(幼・小・中・高・特)	生涯にわたって自分らしく豊かな生活を送っていくためには、家庭科において何をどのように学ばれたいでしょうか。ともに考えてみたいと思います。
教職 大学院	算数・数学科の 授業づくり	畑 稔彦 (はた なるひこ)		教員(小・中)	新学習指導要領で目指す「主体的・対話的で深い学び」について、事例をもとにワークショップ形式で考えます。
教職 大学院	学校のビジョン形成と 評価の手法	大野 裕己 (おおの やすき)		教員(主に小・中・高校)	今日の学校経営改革下で各学校に求められるビジョン形成やその評価の考え方・手法について、学校組織開発や内外連携構築と関連して整理・検討します(講義・演習・コンサルテーション)。 ※学校関係者評価や学校第三者評価実施への関わりについても、本務に支障のない範囲(年度数件程度)で対応できます。

教職探究講座は、滋賀県内外の高校生を対象として、教員の仕事や子どもの発達特徴を理解することを通じて、教職への意識高揚を図ることを目的として実施されるものである。

令和元年度は、長浜北高校、愛知県立豊田北高等学校、愛知県立豊岡高等学校の依頼を受け教職関係の講座を実施した。

- ・長浜北高校：大野祐己（教職大学院）
- ・愛知県立豊岡高等学校 篠原雅史（大学出張講義）
- ・愛知県立豊田北高等学校 長谷川武博（大学出張講義）

また、この講座の重要なプロジェクトとして例年実施されている教職探究講座（東大津高校及び水口東高校）を令和元年12月18日・19日の2日間に渡り、本学部大会議室で実施した。高校生52名と本学部在学学生で各高校OBの参加があり、多角的に教職への意識を高める機会であった。具体的なプログラムは以下のとおりである。

<令和元年度地域教育支援室連携講座「教職探究講座」実施要項>

- 1 目的 教職に対する理解を深めながらモチベーションを高め、進路（教職）に対する視野を広げ、その希望を確かなものとするために、東大津高等学校、水口東高等学校と連携して開催する。
- 2 対象 滋賀県立東大津高等学校、水口東高等学校、1・2年生
（希望者52名）
- 3 主催 滋賀大学教育学部・滋賀県立東大津高等学校・滋賀県立水口東高等学校
- 4 期日 令和元年12月18日（水）・19日（木）
- 5 会場 滋賀大学教育学部 本館3階 大会議室
- 6 日程

（1）1日目：12月18日（水）

- ◆開講式（14:00～14:05） 杉江淑子学部長 挨拶 （司会：糸乗 前 教授）
- ◆第1講（14:10～14:40） 「教職への志が拓く教師の道」 （担当：河口眞佐男 教授）
 - 教職とは
 - ・人を教えること、人に教えることについて考える。
 - ・教職を志す上で大切なこと
- ◆第2講（14:45～15:35） 「授業とICT」 （担当：岩井憲一 准教授）
 - 教育におけるICT活用とは
 - ・ICT活用の重要性
 - ・ICT活用の効果
 - 教育の情報化にむけて
 - ・ICT活用の取り組み
- ◆第3講（15:40～16:30） 教育学部で学ぶとは （担当：畑 稔彦 准教授）
 - 教育学部とは
 - ・各学校種の免許取得方法
 - ・他学部との違い（教育学部の独自性）
 - ・教育学部の可能性（就職）
 - 「先輩に学ぶ」
 - 東大津高校、水口東高校の卒業生OB・OGとの懇談交流会
 - ・「私が滋賀大で学んでいること、感じていること」（先輩からの話）
 - ・「先輩への質問と応答」（高校生からの質問）

(2) 2日目：12月19日(木)

◆第4講(13:30～14:20) 「学校における心理的問題への教師による対応」

(担当：芦谷道子 教授)

- 現代の子どもたちが抱える心理的問題
- 仲間関係の発達的变化
- 教師による関わりと支援

◆第5講(14:25～15:15) 「教師力の形成」

(担当：大野裕己 教授)

- 今なぜ教師力が求められているのか
 - ・教師力とは
 - ・求められるコンピテンシー
- 教師力を高めるために
 - ・教師力の形成と大学での学び
 - ・学び続ける教師と教師力

◆閉講式(15:20～15:30)・・・修了認定証授与(代表)

(司会：畑 稔彦 准教授)

◆Tea Party with Cake set & OB・OG (15:40～16:10)



(講義の様子)



(OG,OB との交流の様子)



(OG,OB との交流の様子)



(Tea Partyの様子)

1. 教育相談領域

これまで同様、非公開での相談業務を継続した。相談場所としては主にカウンセリング室と研究室（芦谷）を用いた。今年度は、教員からの相談、コンサルテーションの依頼が 16 件、スーパービジョンの依頼が 14 件、本人や保護者からの教育相談依頼が 4 件、学生からの相談が 13 件あり、相談延べ件数（2 月末まで）は 47 件であった。スーパービジョンとしてはグループを対象とした自治体への支援や、教員になった卒業生を対象としたものも実施しており、平成 28 年度より継続実施している「野洲市ふれあい教育センター」での、適応指導教室、カウンセラーを対象としたスーパービジョン研修講師は 4 回行った。学生からの相談としては、自身や友人、家族のメンタルヘルスに関する相談が増えた。多重関係を避けるため、継続面接が必要な数事例については、基本的に保健管理センターに繋いでいる。保健管理センターは敷居が高いと感じる学生も多く、教員が必要な支援への繋ぎ手となることの意義を感じている。（文責：芦谷道子）

2. 大津少年鑑別所との連携事業

2014 年度より開始した、大津少年鑑別所と連携事業を引き続き実施し、鑑別所に入所している少年を対象とした学習教室に大学院生を派遣し、教養講話を行っている。時間は一回 30 分～1 時間ほど、頻度は 1 ヶ月に一度程度であるが、残念ながら今年度は補助金の都合で 5 回の実施に留まり、通算 40 回の実施となった。必要に応じて筆者が関係者と枠組みについて検討し、担当院生にスーパービジョンを行っている。鑑別所からは子どもたちに貴重な体験になっていると好評を得ており、また派遣講師にとっても貴重な学びの機会となっている。以下は担当大学院生（M2 瀬戸純一）からの実施報告である。（文責：芦谷道子）

(1) 教養講話実施状況（受講者：各回 1 名）

第 1 回：4 月 16 日、第 2 回：6 月 18 日、第 3 回：7 月 9 日、第 4 回：8 月 13 日、第 5 回：9 月 10 日

(2) 教養講話概要

【テーマ：血液の働きについて】

<内容>血液には白血球や赤血球、血小板があり、感染防御や酸素の運搬、止血機能などを担っている。アニメの鑑賞を通して、血液の働きについて学習し、すり傷ができた時の対応について講義を行った。

<所感>講話を受講する対象者の年齢や学力にはばらつきが大きい。そのため、配布資料にはルビを振り、画像を多く用いて、受講者が理解しやすいような説明を心がけた。始めにスポーツ選手が白血病になった話や学校で血液について学んだことなどを話し、受講者の興味を引き出した。アニメを用いることで受講者が学習を楽しめるようにし、視覚的にすり傷ができた際の身体反応を学ぶことができるようにした。アニメの中の説明が分かりにくい場面では、説明を補足することで受講者が理解できるように努めた。最後に実際の血液検査データを示し、今後採血を受けることになった際に興味を持てるように、腎臓や肝臓の機能を示す数値などについて説明を行った。

受講者の反応を見ながら、適宜質問を行う時間を設け、受講者の理解を確認しながら進めた。対象によって反応は様々であったが、筆者が説明している際はこちらの目を見たり、うなづきながらアニメを見る様子が見受けられた。アニメを知っている者もいたが、興味深く筆者の話を聞いてくれた。受講者の中には、抗がん剤の副作用についての質問なども見られた。講和後の感想文では、「血液の働きが分かった」や「すり傷ができた際には学んだように対応したい」などがあり、今後の受講者の生活に生かされていくのではないかと考えられた。日常生活に身近な内容を取り上げることによって、多少なりとも受講者の学習意欲へ繋がったのではないだろうか。講話での学習で、免疫や代謝など人間の身体の機能について興味を持つきっかけとなればと考える。最後に、筆者にとっても受講者と共に過ごした時間はとても貴重な体験となった。このような機会を与えて下さったことに感謝の意を表する。

3. SKC キッズカレッジ（滋賀大キッズカレッジ）2019 年度連携活動報告

(1) 滋賀大キッズカレッジの教育学部との連携・協力

2017 年に滋賀大学教育学部との連携協定締結後、2 年が経過したが、毎年地道な連携が行われている。

SKC キッズカレッジとしては、相談準備室（207）と教育心理相談室（旧動物実験室）の 2 つを使用させていただいている。また、大学近く（平津 1 丁目）に開設している学習室に保護者が来室する際に大学の駐車場をお借りし、発達障害の児童生徒および保護者の発達相談と学習支援を行うことができている。この点、滋賀大学に対して大変感謝している。

(2) 大学での心理教育相談

現在、大学で行っている教育心理相談では、毎月ほぼ 2～3 件の相談があり、相談室で心理検査と学習検査及び保護者面談を行っている。相談室には複数の小部屋があるので検査と面談を並行して行うことができ助かっている。児童が通う学校との連携の際には、学校の先生に相談準備室に来ていただいて相談をしている。

(3) 保護者・市民向け啓発

本年も、保護者及び市民向けの啓発講演会（「講演とトーク」）を視聴覚教室及び 25 番教師にて 2 回開催した。いずれも 30 人余りの参加者があり、好評であった。講演会に来た人の中から相談につながった方もある。

(4) 学生指導

SKC キッズカレッジからの教育学部に対する連携協力としては、学部、特別専攻科の学生、大学院生に対する臨床観察、論文作成への資料の提供、あるいはボランティアとしての実地研修の場の提供などを行った。学部学生の研修は今年度は 5 名ほどであった。回数は数回から年間を通じての参加などそれぞれに違いはあるが、学習障害、発達障害の子どもたちや保護者に接し、その困難や学校での問題を体験する良い機会となったのではないかと考えている。

(5) イベント活動

日常的には別々に活動しているいくつかのキッズカレッジ学習室が年に 1 回 3 月に一堂に会して行う「お楽しみ会」というイベントを今年も生協食堂ホールをお借りして実施する運びとなっていたが、昨今の新型コロナウイルスの感染拡大予防に取り組む必要性から止む無く中止することになった。学習室は通常通り実施している

ので一斉休校によって登校せずストレスをため込んでいる子どもたちのことがよくわかった。こうしたいわば非常事態において発達障害の子どもたちがどのような状況に陥るかということも教育学と教育実践の大きな課題になるのではないと思う。ある、5年生の子どもは、学校が急に休みになったため大きな心理的混乱が生じ、数日間夜眠れないという状態が続いた。「コロナが怖くて電車に乗れないので、学習室を欠席する」という連絡は数件あった。

(6) 保護者手記の編集

発達障害、学習障害の実態を広く知ってもらうために、現在、キッズカレッジ保護者の手記第2弾（第1弾は2010年に発行）の編集に取り組んでいる。今後、大学以外にも他の諸機関・団体と連携をすすめ、地域の教育支援に取り組みたいと考えている。一層のご支援をお願いする次第である。

（文責：NPO 法人 SKC キッカレッジ副理事長・滋賀大学名誉教授 窪島 務）

4. 予防教育開発実践事業

2016年度より、予防教育開発事業に取り組み、滋賀県において「生きる力を育むモデル校」に指定されている公立小学校にて、英国で開発されたマインドフルネスの小児版である「.b プログラム」や、鳴門教育大学予防教育科学教育研究センターで開発された「いのちと友情の学校予防教育」（トップ・セルフ、TOP SELF: Trial of Prevention School Education for Life and Friendship）の実施などに取り組んできた。

現在、英国オックスフォード大学、MiSP（Mindfulness in Scholl Project）、関西医科大学心療内科学講座、MBSR 研究会と協力し、4か年計画の「.b プロジェクト」に取り組んでいる。本年は、.b プログラムの教材の日本語版作成に取り組み、指導教材、ビデオ、スライドの翻訳を行った。来年度には英国より講師を招聘して、約25名の.b Teacherを養成し、さらに再来年度には、日本の中高生を対象に.b プログラムを実施して効果評価を行う予定である。

【.b プログラム 各レッスンの目標】



（文責：芦谷道子）

1. 事業名および担当者

この年末年始に中国から広がった新型コロナウイルス感染症の問題で、様々な会議やイベント等が中止へと追い込まれています。筆者も参加予定の学会発表においても現地開催が中止になりましたが、以前より取り組んでいた内容と同様の手法でこれを乗り越えた取り組みがありましたので、その内容について紹介します。

事業名は「Web 会議アプリを利用したテレプレゼンスについて」で、担当者は岩井憲一です。

2. 事業の目的

教育学部では、通常の授業だけでなく出前講義や高大連携事業のように学内外でさまざまなセミナー等を行う機会が少なくありません。そのあたりについて以前より遠隔授業・遠隔講演について技術検証知見の収集を目的として取り組んで参りました。この新型コロナウイルス感染症の問題でテレワークやWeb会議／講演が一層注目されるようになってきましたのでこの場をお借りしてご報告したいと思えます。

3. 事業の概要

2.1 Web 会議アプリを利用したテレプレゼンスについて

筆者はこれまでに Zoom[1]という Web 会議アプリを利用して、大学院の遠隔授業などで利用してきました。直接的な理由としては、受講生が大雪のため石山キャンパスに来ることが難しい場合や、実習などで同じ場所で受講することが難しい場合、という状況が散見されるようになってきたからです。そこで「テレプレゼンス」という言葉にもあるように遠隔地間でのやり取りについて模索してきました。

2.2 テレプレゼンスとは

テレプレゼンス(telepresence)とは、名称からも明らかなように遠隔地(tele)間でのやりとりをまるで目の前にいる(presence)ようにする技術や会議システムを指します。現在、新型コロナウイルス感染症収束の一方策として「テレワーク(telework)」が注目されています。テレワークとは、ICT を利用して場所や時間の制約を受けずに自宅など職場から離れた場所で働くという勤労形態を指します。

テレワークを支える技術であるテレプレゼンスとしては、メールやチャット(ビデオ会議)アプリをはじめとして、Web や PDF のような電子書類が挙げられます。これらを併用することで、テレワークが実現できます。今回、令和 2(2020)年 2 月 29 日(土)～3 月 1 日(日)に長崎大学で開催の情報コミュニケーション学会全国大会[2]、および令和 2(2020)年 3 月 17 日(火)～3 月 20 日(金)に広島大学で開催の電子情報通信学会総合大会[3]が現地での開催が中止となりましたが、Zoom というビデオ会議アプリを利用してオンライン学会発表を行いましたので、取り組みの記録として文章にまとめたいと思います。

2.3 Zoom アプリについて

まず Zoom ですが、これは Zoom Video Communications, Inc.の製品です。制限付きながら無料アプ

りもありますし、録画や PowerPoint との併用もできますので、教育分野では利用されている方も多いかと思います。無料アカウントもありますが、40 分の通信制限があるなど本格運用としては少し不便な点が残ります。一方、有料アカウントですと、日本円で月当たり 1,500 円からとなっておりますが、時間制限がなくなり、長時間の録画機能や学会のような Web 会議の機能等様々な機能が用意されておりますので、これからの時代、注目されるようになっていくと思われます。Web 会議機能は図 1 のような遠隔会議やウェビナー(Webinar、Web 経由のセミナー)を可能としています[4]。

実際の発表では、顔出しの必要もなく(今回の発表では顔出しを求められました)、PowerPoint を提示することも可能でした。さらには Zoom で提示したいウインドウを選択できますので、それ以外のコンテンツでも容易に切り替えて提示が可能です。ただ、発表時と質疑応答では、マイクの ON/OFF をこまめに切り替えないとハウリングを起こしてしまうことに気をつける必要があります。



図 1 Zoom を利用した Web 会議の例

4. 今後に向けて

本稿では、「Web 会議アプリを利用したテレプレゼンスについて」と題して、Zoom を利用した Web 会議について紹介しました。大学院教育学研究科の高度教職実践専攻では、特に多くの現職の先生方が学ばれていることから、このような機能を併用するとさらに充実した学びにつながるのではないかと考えます。Zoom は使い勝手もよく、機会がございましたらぜひご利用を検討していただければ幸甚です。

参考文献

- [1] <https://zoom.us/jp-jp/meetings.html>, (2020年3月17日アクセス)
- [2] <http://www.cis.gr.jp/zenkoku.html>, (2020年3月17日アクセス)
- [3] <https://www.ieice-taikai.jp/2020general/jpn/>, (2020年3月17日アクセス)
- [4] <https://zoom.us/jp-jp/webinar.html>, (2020年3月17日アクセス)

(文責 岩井 憲一)

7 教育実習支援（その1）

教育参加カリキュラムは、平成17年に始まり、今年で15年目を迎える。このカリキュラムは1年次の「教育参加プランニング」「事前観察」、2年次の「基本実習事前学習」「交流実習」、3年次の「基本実習（教育実習）」「教育実習中間指導」「教育実習終了後（3年次の秋学期と4年次）の発展実習」「自主参加体験」という滋賀大学のすべての教育参加カリキュラムを、原則として4年間で積み上げ式に体験するプログラムである。特に、地域実習（平成17年から始まった栗東実習、平成25年度から始まった守山実習、平成30年度から始まった大津実習）は、「地域の公立学校における教育支援活動を通して実践的力量を高める」という目的に則り、実習校、教育委員会、大学とが連携して行っている。

1. 教育参加プランニング

1回生の教育参加プランニングは、グループ学習を通して将来の目標を設定し、これからの4年間の学びを計画させるものである。プランニング作業は、個々の学生の立場から、教育参加カリキュラムにおけるそれぞれの実習の位置づけを明確にし、目的意識と見通しをもって、充実した学生生活を送るための一助となるものである。

2. 事前観察

事前観察は、交流・基本実習の事前指導として、附属学校において授業参観等（事前観察）を行う、1回生の活動である。交流・基本実習を行う前に附属学校の日常に触れ、教員としての心構えや学校の現状を体感する機会になっている。

3. 交流実習

交流実習は、学校行事等における準備や運営に、指導者の立場から体験的に関わる実習である。交流実習で、2回生は、小学校では校外体験や運動会、中学校では体育祭や合唱コンクール（文化祭）の指導補助を行っている。先生方や児童生徒とのふれあいを通して、先生方が学校行事等を、どのように準備し、どのような配慮をしながら実施しているのかを実践的に学んでいる。

4. 基本実習

3回生になると、交流実習を行った学校で4週間の基本実習を行う。具体的には、児童生徒の生活指導、授業観察、（研究）授業、一日担任などである。基本実習では、個別の児童生徒の対応にとどまらず、クラス全体を視野に入れて、児童生徒との関係を作っていくこと、授業を進めていくことが求められる。また、多様な児童生徒や様々な課題を抱えた児童生徒と向き合うことでより具体的な対応を学ぶことができる。



地域実習校での教育実習

5. サポーター活動（自主参加体験・発展実習）

地域実習では、基本実習の事前・事後指導の一環として、基本実習の配属校で3年次の3月まで原則として週1回のサポーター活動を行う（栗東実習3回生は全員必修、守山実習及び大津実習3回生は希望者のみ）。基本実習前のサポーター活動は、児童生徒や先生方との関係をつくることに重点を置いている。それを活かして、6月から10月までの実習期間中での、児童生徒との信頼関係の形成、担当教員との授業の打ち合わせ、授業構想・指導案の確認等を行っているので、基本実習のために欠かすことの

できない活動となっている。基本実習修了後の活動は、基本実習で学んだ成果を活かして児童生徒や先生とより深く関わり、学校の教育活動に積極的に参加することを目的としている。なお、基本実習前と実習期間中のサポーター活動は、自主参加体験として、実習後のサポーター活動は、発展実習として単位申請することができる。また、学生が希望すれば、基本実習の配属校で4年次になってもサポーター活動を続けられる。

6. 大学の支援体制

学生への支援体制は多岐にわたっているが、代表的な支援は、以下の3点である。

一つ目は、実習中の支援である。地域実習では、栗東守山実習担当の学部教員が、学生の授業を参観したり、学生から実習の様子を聞いたりして、技術面・精神面への支援を行っている。また、基本実習を行う3回生には、第1ステージ（6月）と第2および3ステージ（9・10月）の間に、教育実習中間指導を実施している。教育実習中間指導では、それぞれの実習校での経験を語り、共有することで、前ステージの課題を見つけ、次ステージに向けての目標を明確にすることをめざしている。

二つ目は、実習後の支援である。基本実習と教育参加プランニングが終了する頃に、各専修専攻毎に教育実習報告会を開催している。3回生が基本実習の成果を発表し、それぞれの経験を振り返る機会を提供している。また、1回生と2回生は、上回生の発表や彼らとの意見交流を通して、次に行う実習の情報を得ることができる。

三つ目は、サポーター活動への支援である。週1回のサポーター活動による学びを充実させるため、3年次の基本実習履修前の段階から発展実習のプログラムへの参加を認めている。具体的には、学生たちが日々の活動を記録し、公開・共有するためのウェブ掲示板SULMS（滋賀大学・学習管理システム）の利用を行っている。SULMSは、学生一人ひとりが日々の実践を整理し、振り返るために活用されている。さらに、学部教員が、SULMSに書かれた学生の記録を閲覧し、アドバイスを書き込むことで、学生の振り返りがより有意義になるよう手助けしている。このように、大学が学生のサポーター活動の振り返りを支援する取り組みを充実させることで、学生が目的意識をもってサポーター活動に臨みやすくし、活動を続ける動機づけを見出しやすくしていると考えられる。



中学校でのスクールサポーター

7. 今後に向けて

今後、重点的に取り組むべき課題は、次の4点である。

第1に、教育参加カリキュラムの運営や改善について、大学と実習校が、より密接に連携して行うシステムを充実させることである。

第2に、学生のニーズを踏まえつつ、協力自治体・協力校の受入体制や大学のサポート体制を洗練させ、サポーター活動がさらにしやすい環境を整えることである。

第3に、これからの4年間を考えるために必要な情報を提案するなど、学生がプランニングをしやすくなるためのきめ細やかなサポートを行うことである。

第4に、教師という仕事のすばらしさや、やりがいを実感させ、教師という職業への意欲を高めさせることにある。

（水野 裕美）

8 教育実習支援（その2）

教育参加カリキュラムを円滑に取り組めるよう、1 回生で行う事前観察のための事前指導、3 回生の基本実習のための事前指導（2 回生で実施）基本実習後の事後指導（3 回生で実施）、4 回生では教職実践演習をおこなっている。

1. 事前観察のための事前指導 8 月 20 日

各校園での観察実習日

小学校：8月30日、中学校：9月4日、幼稚園：10月7、8日、特別支援学校：9月3日+0.5日

【内容】

1	9:00～9:40	求められる教師・メモの取り方
2	9:40～10:00	授業を見る視点と観察・記録及び分析の仕方
3	10:20～12:00	DVD 視聴による授業観察・記録・分析
4	13:00～14:00	授業分析・グループ協議
5	14:05～14:35	まとめ
6	14:40～16:00	観察実習オリエンテーション
	14:40～14:55	各学校担当者の紹介
	14:55～15:00	観察実習の諸注意
	15:00～16:00	校種別学校説明

2. 基本実習のための事前指導（教育実習基礎）7月18日～10月31日

A. 本指導について

「教育実習基礎」の受講を教育実習の履修条件に位置付け、実習参加予定者全員が必ず受講する。

B. 「教育実習基礎」の指導について

(1) 教育実習につなぐために必要な指導内容

- ①授業づくりと教材研究についての講義
(授業の構想と授業のイメージ：指導計画と授業過程)
- ②指導案の大切さと指導案の様式、指導案の書き方の具体についての講義
(指導後、指導案作成に係る課題を提示・・・中学校は各教科)
- ③模擬授業の学習指導案および教材等の作成（各グループごとに集まって作業）
- ④模擬授業の実施と指導Ⅰ（模擬授業および指導案に関する指導）
- ⑤模擬授業の実施と指導Ⅱ（　　　　　　　　　〃　　　　　　　　　）

（２）指導の場と時間の確保

		指導者	令和元年度実施日
A	来学指導 1・・・①と②を指導	附属教員	7月18日(木)
B	グループ作業・・・③の活動	大学教員	8月21日(水) 9:00～12:00
C	来学指導 2・・・④を指導	附属教員	8月23日(金) 9:00～12:00
D	来学指導 3・・・⑤を指導	附属教員	小：10月24日(木)14:30～17:00 中：10月3日(木) 17日(木) 10月31日(木)

3. 基本実習後事後指導 11 月 14 日、28 日

【テーマ】 実習を通じた成果を振り返り、改善と協働できる教師を目指す

【内容】 ・教育実習を手掛かりに振り返り思考と改善の態度ができるようになる
・仲間と協働し、仲間同士で育ちあう機会にしよう

【日程】 14 : 30 ~ 14 : 40 はじめに
14 : 40 ~ 15 : 10 自己評価書への記入
15 : 20 ~ 16 : 50 「実習を終えて」グループ協議
課題 1 : 「教育実習で何を学び、何が自分の課題になったのか」
課題 2 : 「実習を終え、教職への志向・迷いと これからの自分の生き方」
16 : 55 ~ 17 : 25 グループ別協議の報告 キーワードで
大講義室 : 1 班から 20 班
中講義室 : 21 班から 40 班

4. 学級担任実践研修 10 月 10 日~3 月 24 日 (14 : 30~16 : 00)

教職を目指す 4 回生の指導として具体的な教育活動を想定とした学級担任研修をおこなった

【内容】

10 月 10 日 学級づくり
朝の会・帰りの会、係活動、掲示物
11 月 21 日 保健指導、特別支援計画の作成
12 月 12 日 児童・生徒理解及び生徒指導
保護者対応、連絡帳の返信
3 月 23 日 所見の書き方
3 月 24 日 4 月 8 日の週の仕事
3 月 30 日 個々の学生との面談



本年度 1 回生から 4 回生まで教育参加プログラムを見据えた事前指導や事後指導を行ったが、何よりどの指導も学生に意欲を持たせること、ビジョンや見通しを持たせることに配慮した。演習方式を取り入れたり、指導案を実際に作成させてのぞませることで机上の議論にはならないように工夫した。グループ協議などで課題についてそれぞれの卒業までのスパンの中で何をすればいいのかも感じさせることができた。課題として個々の学生によって思いや捉え方が違うので少人数にしたり、いつでも相談できる教育相談的な機会も学生にはサテライトとして必要と感じた。次年度も指導の内容の更新と指導の工夫改善に留意していきたい。

(狩野 秀樹)

9 キャリア支援の取り組み

1. 事業名および担当者

事業名：キャリア支援事業 担当者：学部教員 松岡尚文

2. 事業の目的

面談による助言などをおして学生一人ひとりが充実した学生生活を送り、将来の職業人としての資質向上が図れるよう支援する。また、教員採用試験受験に向けた指導や助言を行う。

3. 事業の概要

1) 主な取り組み

①グループ・ガイダンス

1回生全員が対象。5名程度のグループを編成し、5月の連休明けから7月中旬までに授業の空き時間を利用して研究室で実施。ガイダンスの時間は40分。キャリア支援の活動紹介のほか、大学生生活を送るうえでの助言や卒業生の進路状況の説明などを行う。いつでも気軽に相談できるという安心感を与えることを第一目的にしている。また、本学へ入学した理由、大学生活の満足度、教職を目指す気持ちなどについてアンケート調査（後に結果の一部を掲載）を実施し、進路相談などを行う際の基礎資料としている。

②進路相談

学部生・院生の希望者が対象。教職に就くことへの不安、教職以外の就職、大学院への進学、教員採用試験の校種や受験する自治体の選択など進路に関する相談を行う。

③採用試験対策の指導

主に3・4回生と院生の希望者が対象。出願書類の添削や論作文、面接試験への対応について全体指導を行う。個人指導については、希望者が一定期間に集中するため時間確保が課題となっている。

④フォローアップ・ガイダンス

教員採用試験の不合格者のうち希望者が対象。今後の進路希望について十分に話を聞き、場合によっては進学や講師登録などについて助言するとともに、次年度の採用試験に向けた具体的な対策などについても助言する。

2) アンケート調査結果の一部

①「あなたが本学へ入学した理由は何ですか」（1つ選択）

- | | |
|---------------|---------------------------|
| 1 教職を目指しているから | 2 入試難易度や受験科目などが自分にあっていたから |
| 3 国立大学法人だから | 4 親や高校の教師などが勧めたから |
| 5 特に理由はない | 6 その他 |

回答年度	平26	平27	平28	平29	平30	令和元
1	70.4%	65.3%	68.7%	71.9%	67.2%	55.2%
2	6.4%	10.5%	9.6%	8.7%	12.4%	19.9%
3	12.4%	14.9%	13.7%	11.6%	9.5%	16.6%
4	4.4%	4.8%	4.4%	4.1%	6.2%	5.4%
5	0.4%	0.8%	0.4%	0.8%	1.2%	1.2%
6	6.0%	3.6%	3.2%	2.9%	3.3%	1.7%

②「あなたは本学での大学生活に満足していますか」（1つ選択）

- 1 大変満足している 2 ほぼ満足している
3 やや不満である 4 大いに不満である

回答年度	平26	平27	平28	平29	平30	令和元
1	24.8%	37.1%	25.7%	24.8%	33.6%	29.9%
2	66.4%	57.7%	69.5%	67.8%	61.0%	63.9%
3	7.6%	4.4%	4.8%	7.4%	5.0%	5.4%
4	1.2%	0.8%	0%	0%	0.4%	0.8%
1+2	91.2%	94.8%	95.2%	92.6%	94.6%	93.8%
3+4	8.8%	5.2%	4.8%	7.4%	5.4%	6.2%

③「現時点であなたの教職を目指す気持ちはどの程度ですか」（1つ選択）

- 1 ぜひ教職を目指したい 2 できるだけ教職を目指したい
3 教職以外を目指したい 4 どうするか決めていない

回答年度	平26	平27	平28	平29	平30	令和元
1	58.8%	58.9%	66.3%	66.9%	56.0%	54.8%
2	30.0%	32.3%	23.7%	26.9%	31.1%	32.8%
3	2.8%	3.2%	2.8%	2.1%	6.6%	4.1%
4	8.4%	5.6%	7.2%	4.1%	6.2%	8.3%
1+2	88.8%	91.2%	90.0%	93.8%	87.1%	87.6%
3+4	11.2%	8.8%	10.0%	6.2%	12.9%	12.4%

④「あなたは週1日以上定期的にアルバイトをしていますか」

- 1 している 2 していないが、する予定である 3 していないし、する予定もない

回答年度	平29	平30	令和元
1	66.1%	68.5%	68.9%
2	28.5%	26.6%	24.5%
3	5.4%	5.0%	6.6%
1+2	94.6%	95.0%	93.4%

⑤「あなたは奨学金を受けていますか」

- 1 受けている 2 受けていない

回答年度	平29	平30	令和元
1	28.1%	32.0%	32.0%
2	71.9%	68.0%	68.0%

4. 今後に向けて

適切な教育観や使命感の形成に寄与するとともに、将来の職業人としての資質向上が図れるよう支援していく。また、教員採用試験において実力を十分に発揮できるよう指導や助言をしていく。

(松岡 尚文)

	教職キャリア教育支援	教育実習支援	石山プロジェクト	共同研究・年報
4月	・新入生対象グループガイダンス諸準備（実施時間希望調査・実施日時連絡等4～5月） ・大学推薦選考面接（4～5月） ・進路相談（通年）	・実習担当教授と打合せ ・教育実習委員会 ・守山・栗東市教委挨拶 ・栗東市教委打合せ ・実習連協（栗東・守山・附属） ・基本実習オリテ ・開始式（守山・大津・栗東） ・学生面談	・春学期実施の打合せ <事務> ・石山SS春学期（ポスター作成）	・年報第2号HP掲載
5月	・新入生対象グループガイダンス（5～7月）	・実習校挨拶（大津・栗東・守山） ・京都サポートセミナーオリテ ・サクセス説明会 ・京都府セミナー説明会 ・地域実習説明会 ・3回生・4回生実習交流会	・退職女性校長会への協力依頼 <事務> ・石山SS春学期募集締切5/8 ・石山SS打合せ会 ・石山SS省察会 <事務> ・石山小SS省察会旅費・謝金申請	
6月	・採用試験対策指導（小論文・面接） ・模擬集団討論指導用資料作成と全体講義	・教育実習訪問（守山・栗東・大津・附属） ・学生面談 <事務> ・実習アンケート結果作成 ・2019年度実習スケジュール一覧作成 ・旅費申請	・石山SS省察会6/28（幼・小） <事務> ・石山小SS省察会旅費・謝金申請	
7月	・採用試験対策個別指導（小論文・面接） ・1回生・4回生懇談会	・学生面談 ・3回生実習中間オリテ ・実習基礎 ・教育実習委員会 ・地域実習オリエンテ	・石山SS省察会7/19 <事務> ・石山SS秋学期募集ポスター作成・受付	・共同研究審査 <事務> ・共同研究締め切り ・共同研究応募の一覧作成と採択通知
8月	・新入生アンケート調査集計 ・採用試験対策指導（自己PR文・面接） ・フォローアップ	・実習基礎（幼・小・中） ・観察実習事前指導 ・免許更新講習会 ・学生面談 ・交流実習開始式 <事務> ・志望調査結果集計、グラフ作成		
9月	・採用試験対策用資料の見直し ・フォローアップ	・教育実習訪問（栗東・守山・大津） ・学生面談 <事務> ・実習関係（旅費申請）	・石山SS省察会 <事務> ・石山プロジェクト秋学期募集（ポスター作成・応募者受付） - 旅費・謝金申請	

教職実践講習 探究探究講座	出前講義・校内研究	滋賀県総合教育 センターとの共同研究	学力向上 プロジェクト	
	<事務> ・講師依頼について担当教授に連絡（通年） ・問い合わせについて回答（各担当より） ・ファイリング	・トータルアドバイザーとして連携総合窓口を担当 河口先生（通年）		4月
・教職探求講座について（東大津高等学校より依頼） 本館3階大会議室予約	<事務> ・出前講義の加筆・修正等締め切り5/7 ・HP更新 「2019年度 出前講義一覧」5/16			5月
				6月
<事務> ・高大連携の準備				7月
				8月
				9月

	教職キャリア教育支援	教育実習支援	石山プロジェクト	共同研究・年報
10月	・フォローアップ ・3回生教員養成研修講義資料作成	・実習基礎【中】 ・実習基礎【小】 ・栗東・大津教育実習訪問 ・教育参加ガイダンス ・学級担任実践研修 ・学生面談 ・教職実践演習(10～11月) ・実習委員会	・石山SS打合せ会(幼・小) <事務> ・石山SS秋学期募集締切10/10 ・石山SS参加者ネームプレート、一覧作成、連絡	
11月	・3回生教員養成研修講義 ・フォローアップ	・教育参加プランニング ・学級担任実践演習(11～12月) ・事後指導Ⅰ・Ⅱ(3回生) ・学生面談 ・教育実習委員会 ・草津市教育委員会挨拶 <事務> ・事後指導ⅠⅡアンケート作成、集計、グラフ作成	・石山SS省察会(幼・小) <事務> ・石山小SS省察会旅費・謝金申請	
12月	・フォローアップ	・栗東・守山実習連協 ・院生面接指導 ・附属学校園連絡協議会 ・学生面談 ・学級担任実践演習 ・実習後指導、補講 ・守山教育実習連合協議会 <事務> ・1回生アンケート集計	・石山SS省察会(幼・小) <事務> ・石山小SS省察会旅費・謝金申請	
1月	・資料整理	・大津実習校確認 ・実習後指導補講 ・学生面談 ・教育実習委員会 ・令和元年度実習まとめ	・石山SS省察会(幼・小) <事務> ・石山小SS省察会旅費・謝金申請	
2月	・3回生スタートアップ事業用資料作成と講義 ・各種記録等の整理	・実習基礎(補講) ・令和2年度実習計画立案(2～3月)	・石山小SS報告会(2/18) <事務> ・石山SS報告会旅費・謝金申請 ・報告会ネームプレート作成等	<事務> ・年報原稿依頼(共同研究、センター業務) ・年報関係業務
3月	・次年度新入生対策グループガイダンス用資料作成 ・引継書作成と後任者への引継ぎ	・学級担任実践演習 ・令和2年度実習計画立案	・石山幼SS省察会(3/6)	<事務> ・年報原稿締切3/13 ・年報原稿締切確認 ・年報HP掲載前の確認

教職実践講習 探究探究講座	出前講義・校内研究	滋賀県総合教育 センターとの共同研究	学力向上 プロジェクト	
・教職実践演習 10月（河口先生）				10 月
・教職実践演習 11月（河口先生） <事務> ・教職探究講座準備 (12月18日・19日)				11 月
<事務> ・Tea party参加人数、生 協へ連絡 ・教職探求講座OB参加学 生募集 ・教職探求講座2日目、原 議書提出 ・参加学生の認定証作成				12 月
・教職探求講座OB参加 学生へお礼				1 月
			・豊郷町教務主任会 (大野・畑先生指導助 言) ※タイ実習中止の時 は2/18参加します。	2 月
	<事務> ・出前講座にご協力いた だいた先生方へお礼			3 月

教育実践総合センター年報 第3号

2020年3月発行

滋賀大学教育学部 教育実践総合センター

〒520-0862 大津市平津二丁目5番1号

TEL 077-537-7993 (直通)

FAX 077-537-7909

<https://www.edu.shiga-u.ac.jp/cerp/>



SHIGA UNIVERSITY